

赤塚次郎
jiro akatsuka

濃尾平野における 弥生時代後期の土器編年

1 はじめに

弥生時代中期末葉とされる「高蔵式」以降の濃尾平野の土器編年を総括してみたい。取り扱う時代は弥生時代後期から古墳時代初頭までで、西暦1・2世紀を中心に考えてみることにする。編年に使用する土器群は一宮市八王子遺跡を含む「萩原遺跡群」と朝日遺跡の資料を中心に整理しておきたい。さて弥生時代後期の土器といえばおおむね「山中式土器」に相当することは衆目の一致をみているものと思われる。山中式は大参義一によって設定された土器様式であるが、その解釈により多くの多様性が存在することもまた事実である。それは「欠山式」を巡る問題と良く似ているようでもある。ここでは1992年に提示しておいた山中式土器の再編*と宮腰健司による朝日遺跡の良好な土器群の提示**を基礎に、加えて八王子遺跡での成果を踏まえ、あらためて整理しておきたい。

結果的には弥生時代後期の土器を「八王子古宮式」と「山中式」に大別することになる。

2 八王子古宮式の設定

近江湖南系土器の参入によって誕生した新しい土器群を「八王子古宮（はちおうじふるみや）式」として設定する。基本器種は、まず高杯では高杯Aとした盤状高杯と、高杯Bとした小型盤状高

杯に代表される。甕は近江湖南型平底甕（甕A）そのもの、あるいは類似する平底甕（甕B・古宮型平底甕）によって代表される。前半の段階では甕Cとした台付甕は極く少量であり、主体的ではない。鉢においても近江湖南系有段口縁鉢が中心であると考えられる。現状では器台の存在は確認できないが、受容されている可能性が高い。その他、壺は在地の土器の系譜上に位置づけたい。壺C・Dの加飾広口壺は、高蔵式からの系列で考えられる。以上のように、壺を除いて多くの器種がどうやら近江湖南系土器を基本にするようである。ただし高杯Bとした小型盤状高杯は近江地域では一般的ではないようだ***。いずれにしても、このような土器様式がはたしてどのような範囲に普遍化できうるかが今後の課題となろう。従来の「高蔵式」と「山中式」の間を埋める重要な土器群として評価したい。近江色は八王子古宮I式初頭段階以降に急速に消失し、在地的な在り方を志向しながら新たな土器様式としての様相を整えていく。

八王子古宮式をI式とII式に大別し、その中に複数の様相が存在するであろう点を想定しておきたい。今後はさらに類例の増加をまって、あらためて小様式と段階設定を行う必要がある。

2-1 八王子古宮I式期

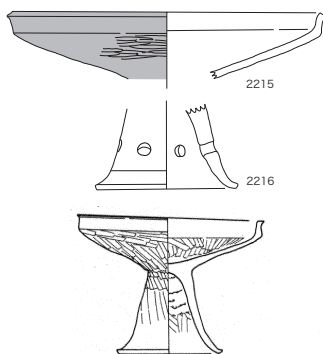
近江湖南型平底甕によって代表される様式である。a・b・cの三つの様相を想定しておきたい。様相のIaでは近江湖南型平底甕が主体を占め、

* 赤塚次郎 1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集

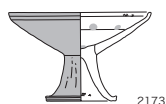
** 宮腰健司編 2000『朝日遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第83集

*** 湖南地域の土器様相については伴野幸一氏にご教示賜った。

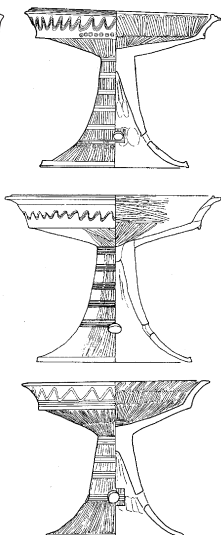
高杯A
盤状長脚の有段高杯
盤状高杯



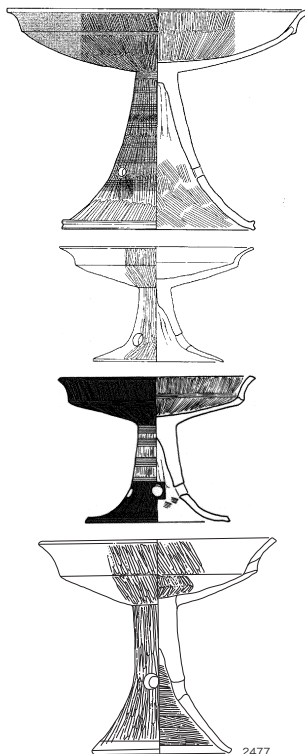
高杯B
盤状長脚の小型有段高杯
小型盤状高杯



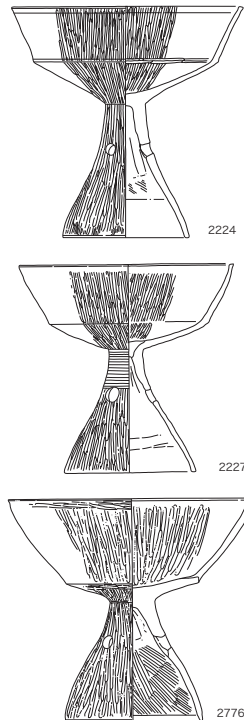
高杯C
吉備系の有段高杯
波状文・擬凹線文を多用する
山中型高杯A



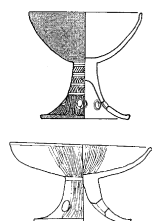
高杯D
杯部口縁が大きく外反
杯部の加飾は消極的
山中型高杯B



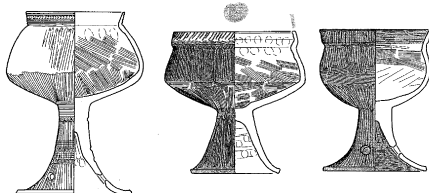
高杯E
内彎志向を持つデザイン
八王子型高杯



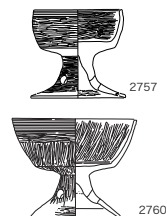
高杯F
椀型高杯



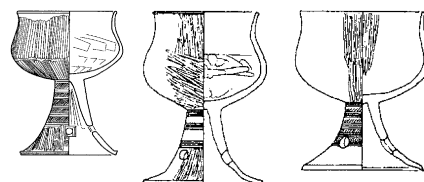
高杯G1
口縁部に加飾文様帯を有する
ワイングラス形高杯



高杯H1
有稜高杯



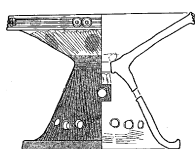
高杯G2
ワイングラス形高杯



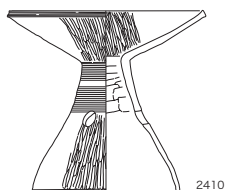
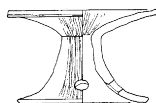
高杯H2
西濃型有稜高杯



器台A
東海系器台A



器台B
内彎志向
東海系器台B



器台C
中空器台

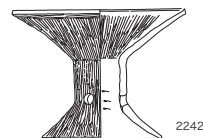


図1 高杯・器台の分類

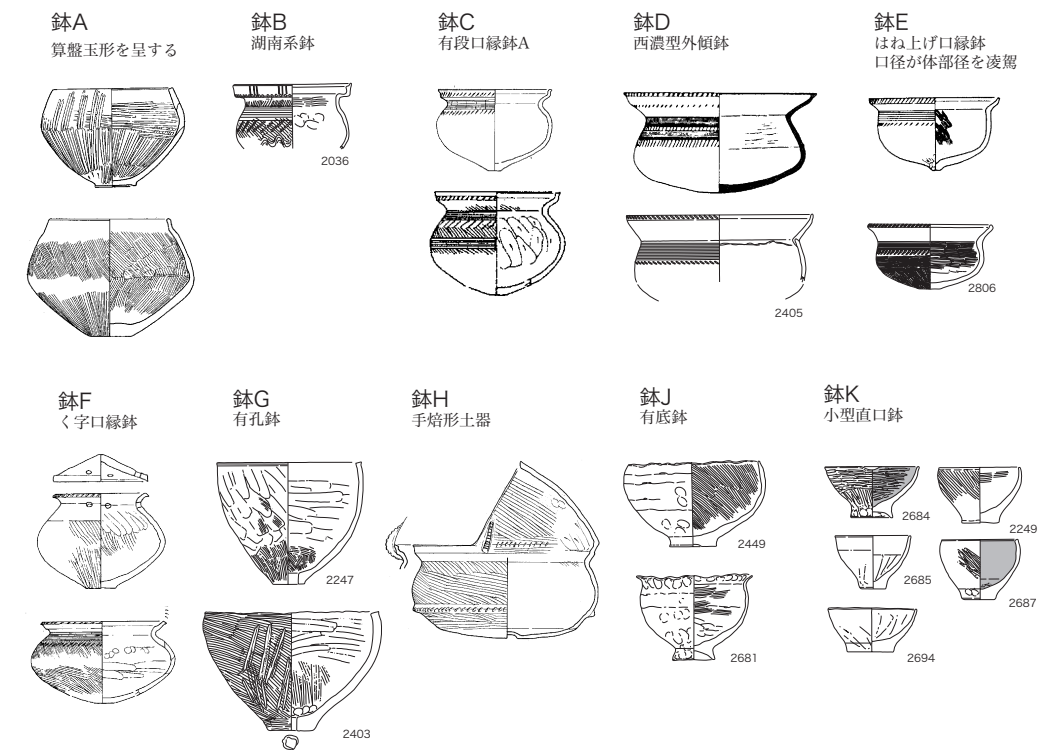
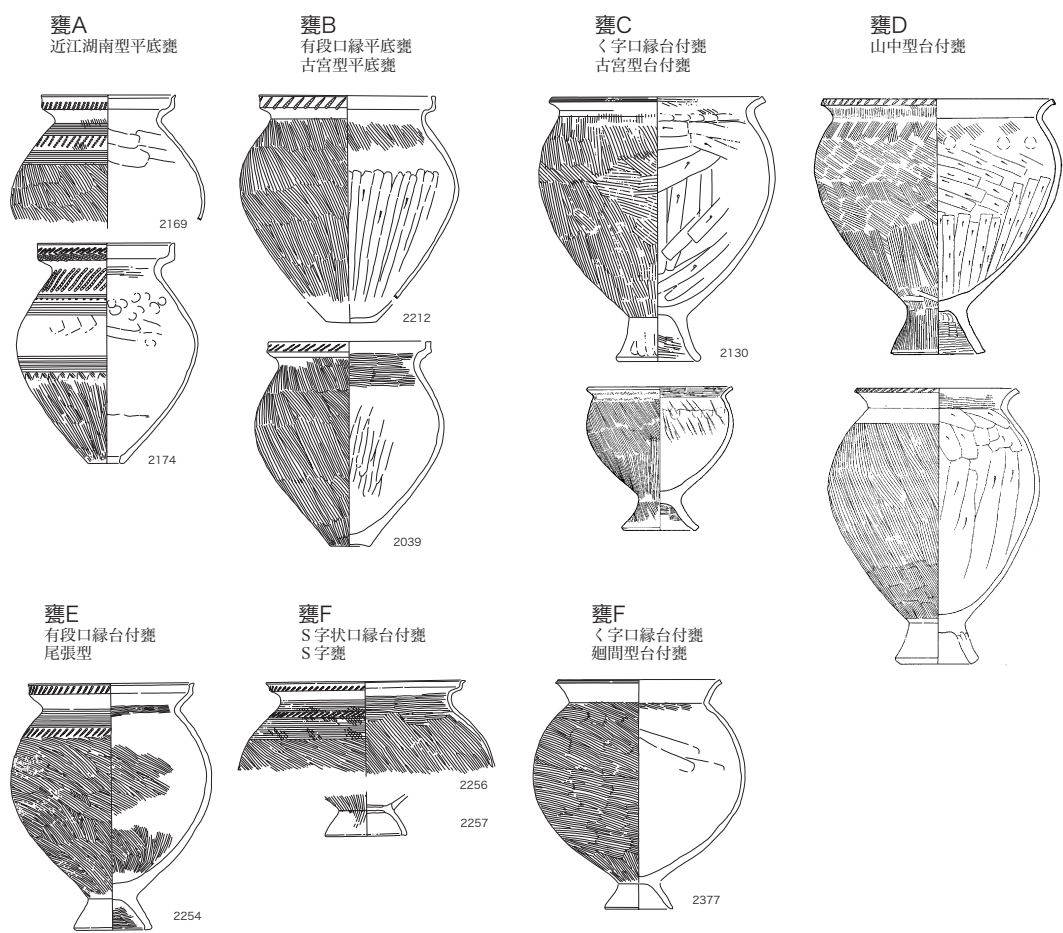
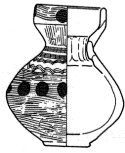
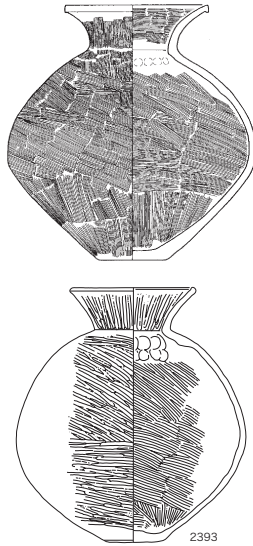


図2 甕・鉢の分類

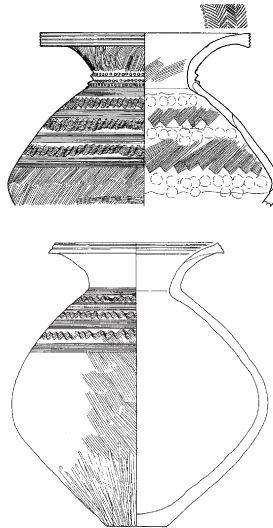
壺A
有段口頸・袋状を志向



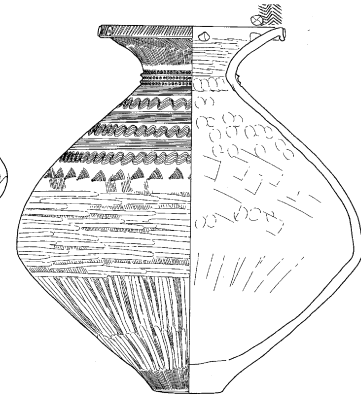
壺B
広口壺（無文）



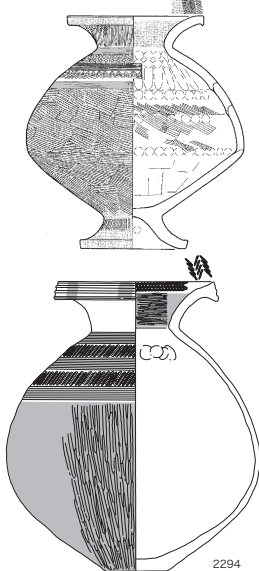
壺C
口縁部に擬凹線を施す
擬凹線系加飾壺



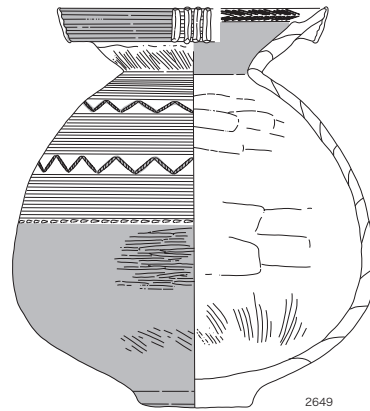
壺D
刺突文系加飾壺



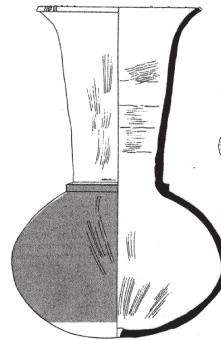
壺E
パレススタイル壺A
擬凹線系赤彩加飾広口壺



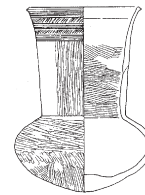
壺F
パレススタイル壺B
赤彩波線文加飾広口壺



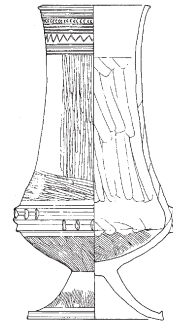
壺G
大型長頸壺



壺H
長頸壺



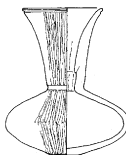
壺J
複雑なデザインをもち
加飾性豊かな
山中型長頸壺



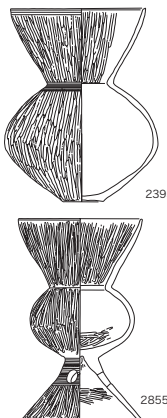
壺K
短頸壺



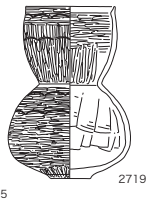
壺L
細頸壺



壺M
内彎口頸壺



壺N
ヒサゴ壺



壺O
（脚付）内彎口頸土器
東海系内彎土器



壺P
台付内彎長胴土器
八王子型内彎土器



壺Q
直口壺

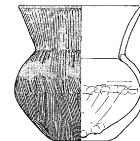


図3 壺の分類

八王子古宮式

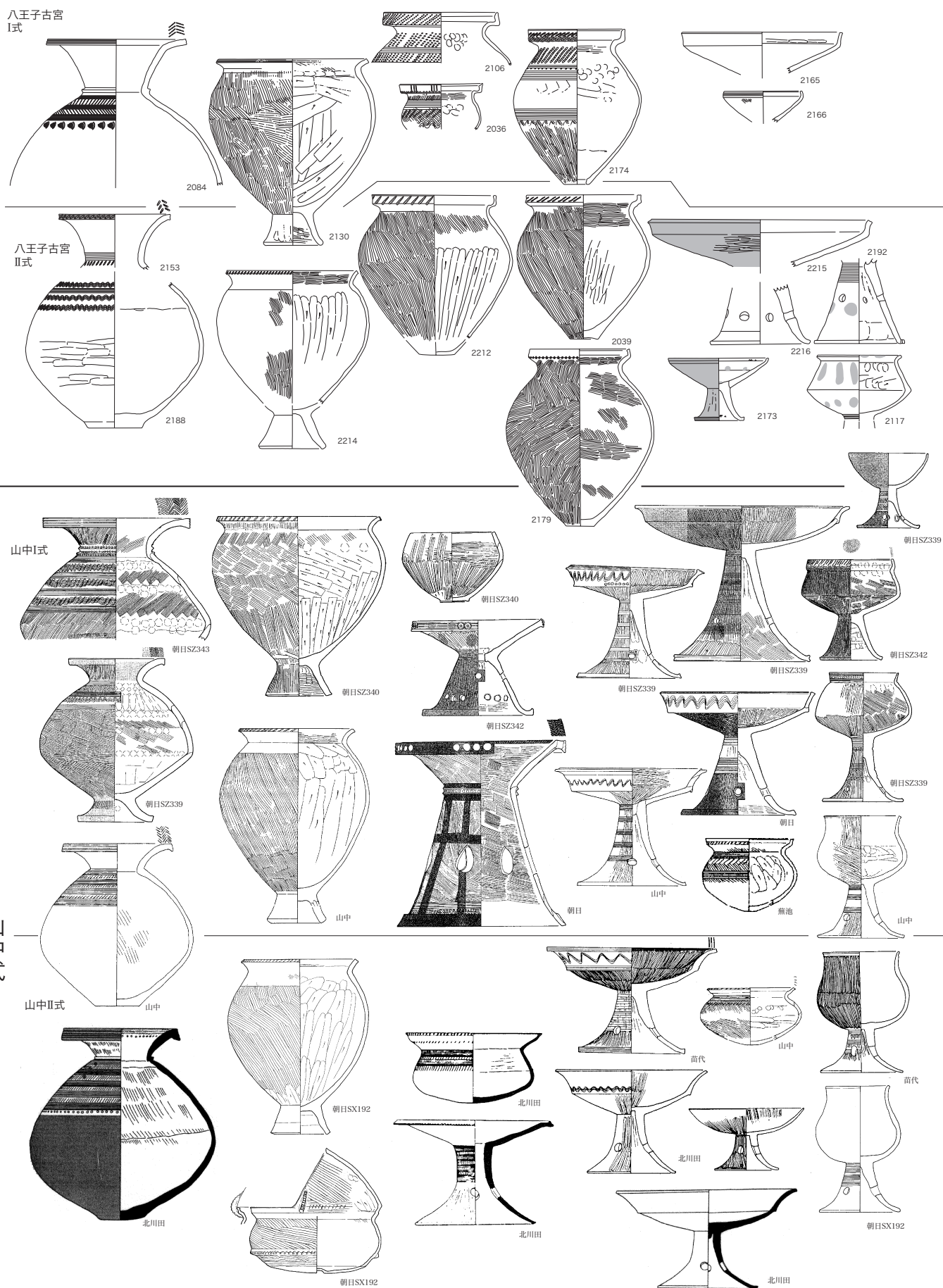
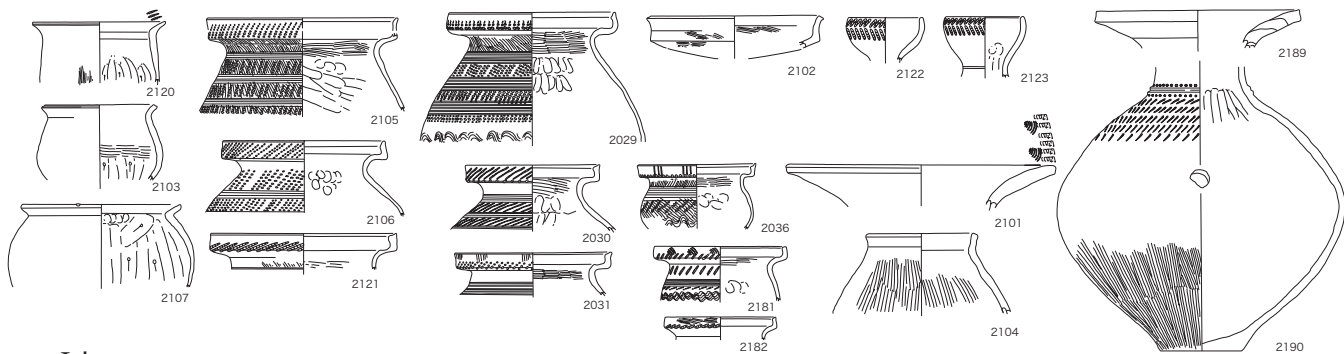


図4 弥生後期土器編年略表 (1/8)

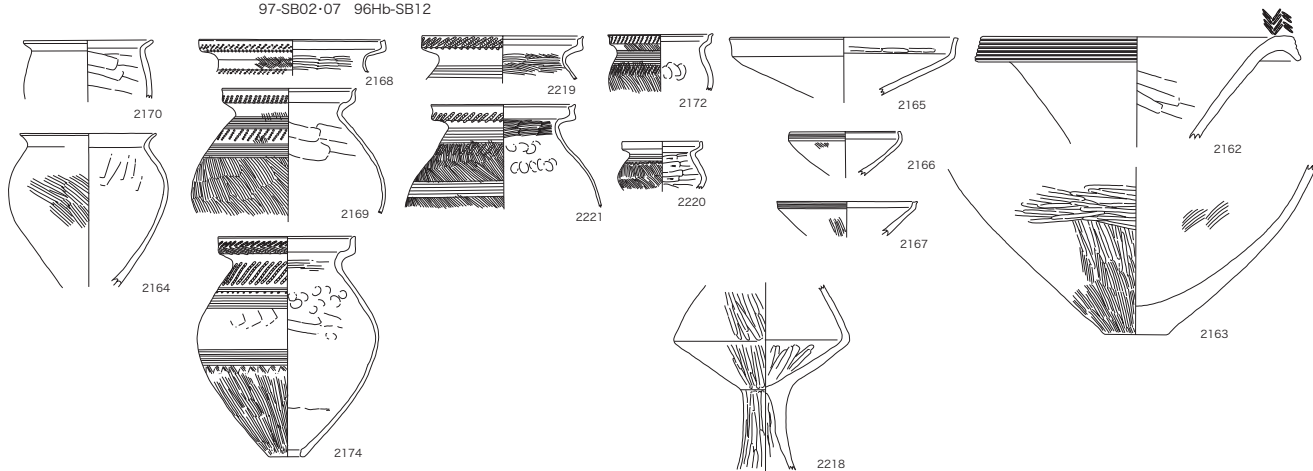
八王子古宮 I 式

I a 95D2-SB64
95E-SB14



I b

97-SB02-07 96Hb-SB12



I c

95D-SB48 95E-SB16

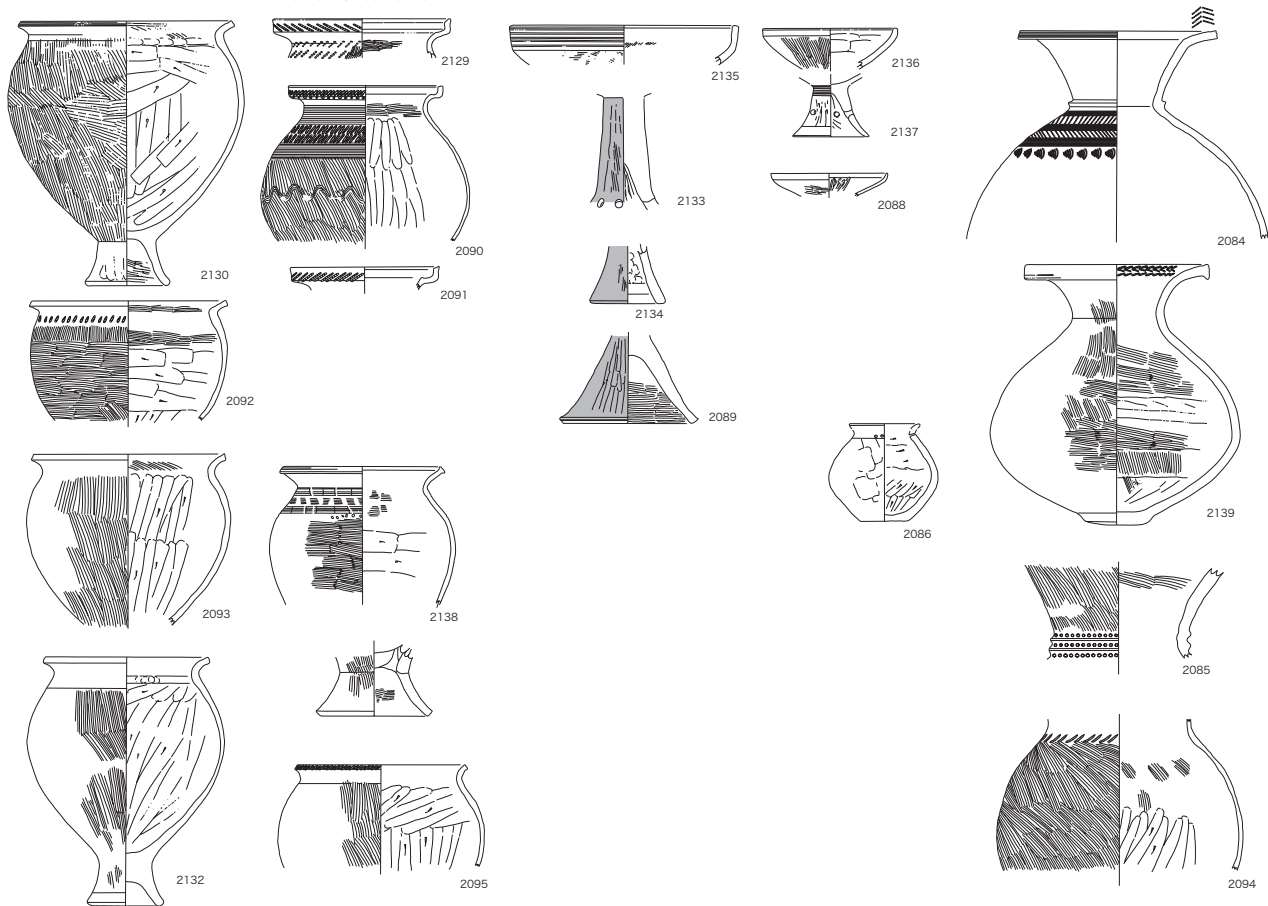
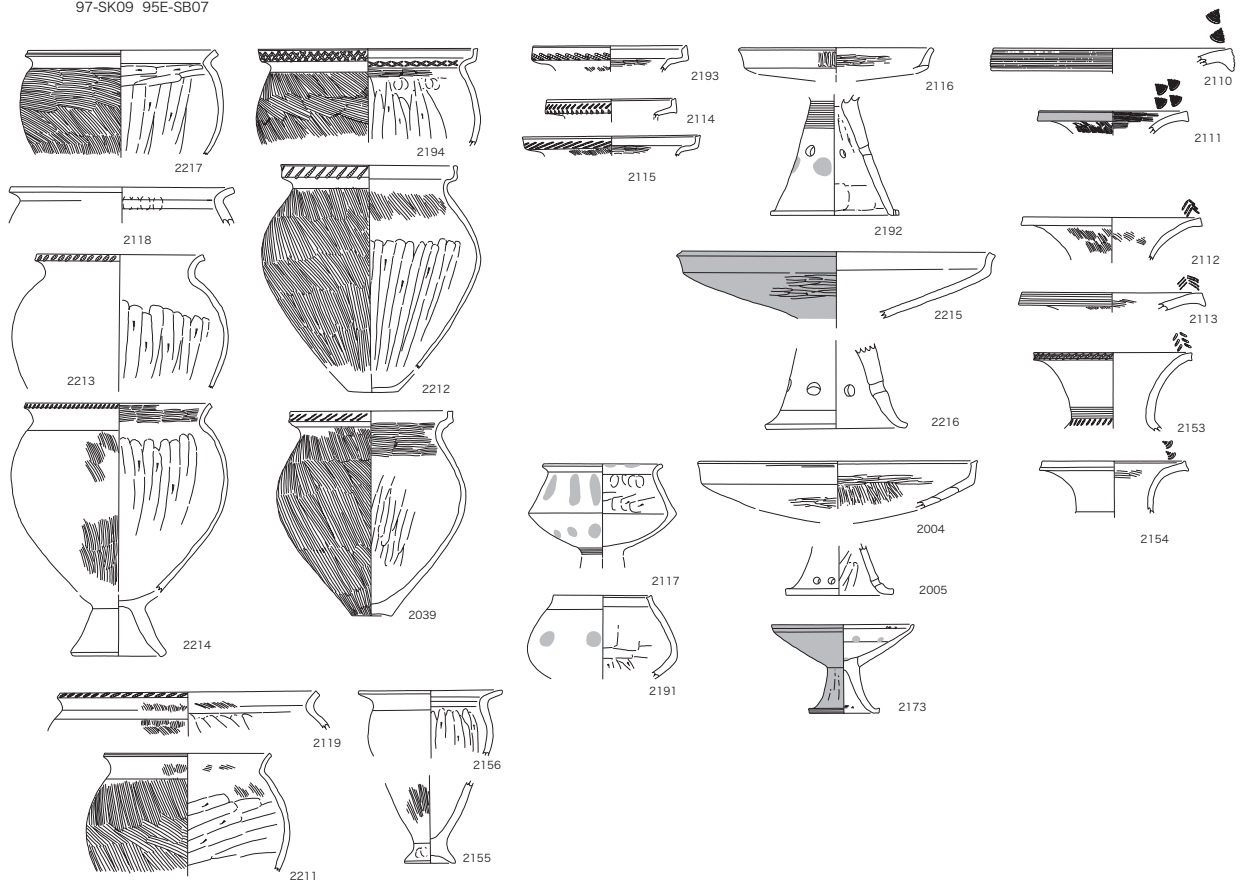


图5 八王子古宮 I 式 (1/8)

八王子古宮Ⅱ式

Ⅱa

Ha-SB08 95E-SB31
97-SK09 95E-SB07



Ⅱb

96Hb-SB22
95E-SB30 95E-SK47

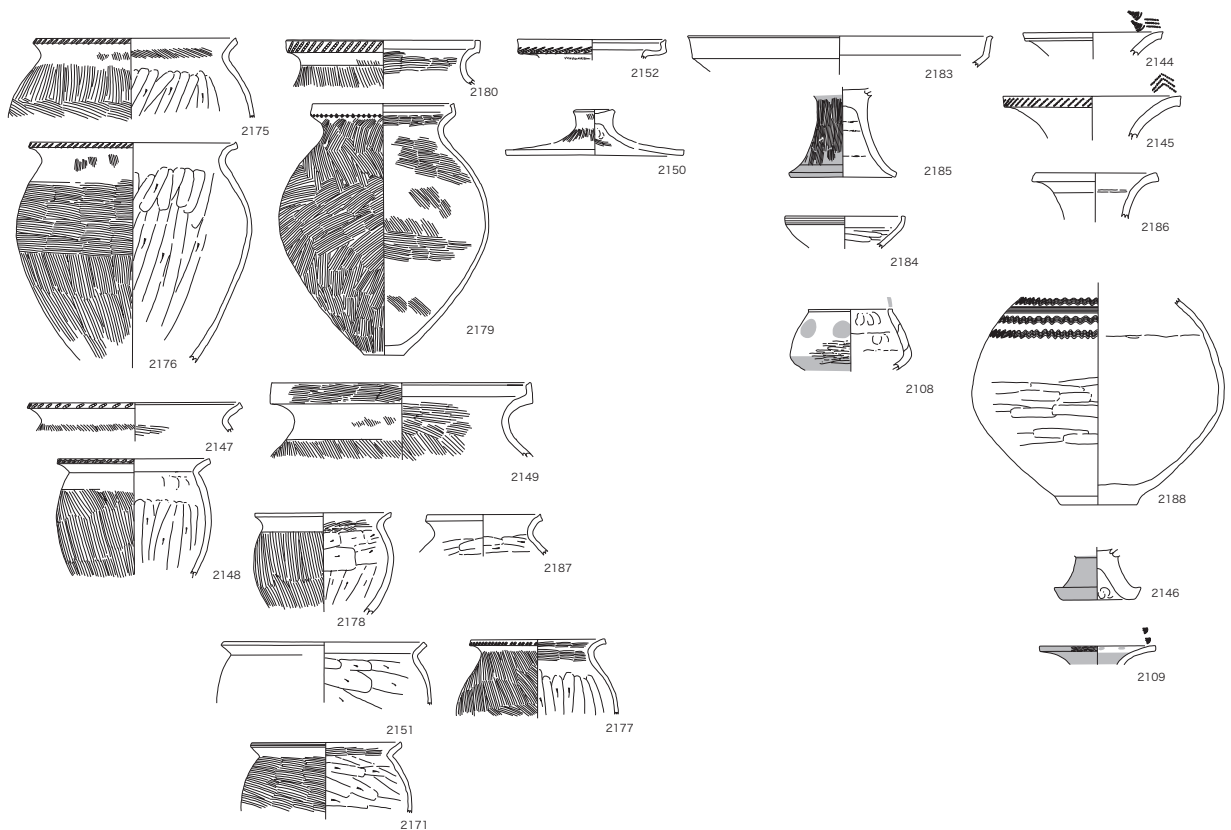
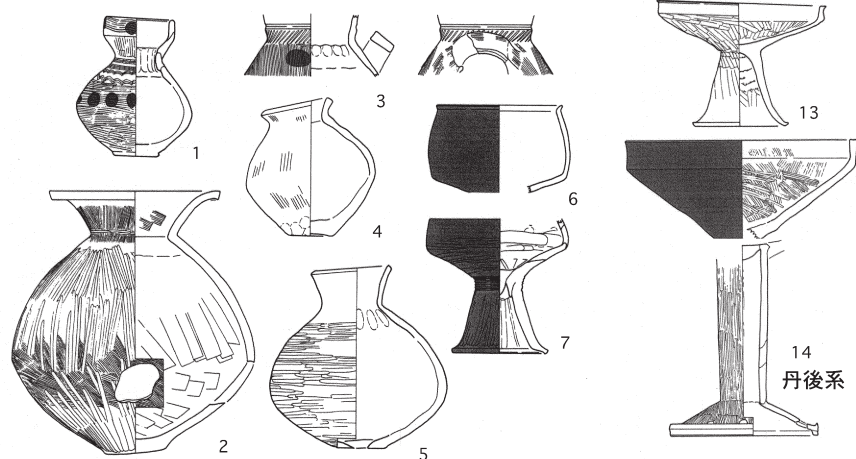


図6 八王子古宮Ⅱ式 (1/8)

朝日 SZ123 1~7

朝日遺跡
関連資料



朝日 SZ344 8~12

朝日 SDVc

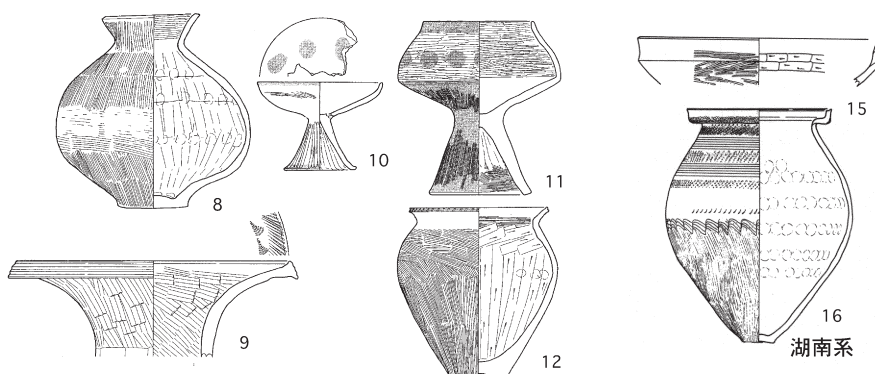


図7 八王子古宮式（朝日遺跡出土品）

『朝日遺跡 V』1994・『朝日遺跡 VI』2000 より

その他の甕としては高蔵式からの系列をもつ台付甕が共伴する。体部内面はケズリ調整し、体部外面にはナデ調整をするものが多く見られるようである。壺ではやはり高蔵式からの系列としての袋状を志向する壺 A が残存する。次の Ib は有段部が縮小する近江湖南型平底甕の系列的な変遷を中心に、盤状高杯の増加が認められる。最後の Ic になると近江湖南型平底甕が急速に消失し、替わって台付甕が散見できるようになる。甕 C とした内面ケズリ調整で外面には単斜ハケ調整をする台付甕（古宮型台付甕）は、口縁短部には面を持ち、沈線やハケ調整が残る場合が多い。高蔵式期以降に存在する台付甕を発展させた新たな台付甕がようやく普遍化しようとしているものと考えたい。壺は加飾広口壺が主体で、凸帯や刺突文を駆使して加飾性を高めていく。以上のように八王

子古宮 I 式期は、湖南系土器の参入と高蔵式系列土器群との融合と創造による、変化に満ちた土器様式でもある。

2-2 八王子古宮 II 式期

I 式期と異なり、近江湖南系色はほとんど見られなくなる。甕では甕 B とした湖南型を独自に解釈した古宮型平底甕が多く見られるようになる。古宮型平底甕は明らかに湖南型を独自に解釈して生み出された型式であり、内面にはケズリ・ハケ調整が多用されるなど伝統的な台付甕との融合が見て取れる。様相 IIb では甕 C の古宮型台付甕に新たに甕 D である山中型台付甕の祖形と思われる器種が誕生する。盤状高杯は I 式期ではミガキ調整がほとんど認められないのに比べて、明瞭な



ミガキ調整が加わる。また脚部の長脚化から直線的な開脚化に志向する。そしてさらに重要なものとして「赤彩斑文」の存在があげられる。高杯や壺を中心にして赤い円形文（赤彩斑文）が描かれる。赤彩斑文は八王子古宮Ⅱ式から山中Ⅰ式前半期に盛行する。壺ではやはり加飾広口壺が主体を占め、櫛描扇状文や波状文が多用される。Ⅱbでは古宮型平底甕に替わって台付甕が主体を占めるようになる。急速に平底甕が消失する。台付鉢や高杯からワイングラス形高杯がⅡ式期の中で出現し、しだいに増加する傾向が見られる。

3 山中式再論

高杯C・Dの山中型高杯の出現をもって山中式の誕生を考えたい。さらに東海系器台とパレススタイル壺を付け加えることができるようである。朝日遺跡SZ339の良好な資料*は山中式の初源を考える上で最も重要な資料となろう。なお山中式の誕生には丹後系（八王子古宮Ⅱ式期から）と吉備系の影響が必要であったと考えている。高杯Cは明らかに吉備の鬼川市式初頭段階の形態をイメージされるものであるし、朝日遺跡の柱状脚の盤状あるいは皿状の高杯は丹後系（北陸系）のイメージであろう**。器台に見られる涙状透や箱型を呈する高杯などに日本海沿岸地域による影響を垣間見ることができる***。八王子古宮式を基盤にして吉備や丹後地域あるいは北陸地域の影響を受けつつ新たな土器様式が誕生する。それは濃尾平野で最も華麗にして優美なデザインを所有する山中様式であった。朝日遺跡95・96年度地区（新資料館地点）の調査成果により、山中式前半期の様相が明らかになった。そこでここであらためて山中式を大きく山中Ⅰ式とⅡ式に二分しておきたい。

3-1 山中Ⅰ式期

朝日遺跡95・96年度調査地点の朝日遺跡SZ339を初めとする一群の土器と山中遺跡・蕪池遺跡****をもってⅠ式を設定する。従来の山中式1・2段階と、これに先行する土器（0段階）をもって考えたい。加飾性豊かな山中型高杯と山中型台付甕、東海系器台と口縁部に加飾文様帯を有するワイングラス形高杯G1に代表される。

1～3段階の変遷が見られる。

山中Ⅰ式1段階

朝日遺跡新資料館地点の墳丘墓資料をもって標識としたい。高杯はミガキ調整を行う盤状高杯Aが主体をなし、赤彩を多用し、赤彩斑文が施される場合もある。波状文を中心とした加飾性はほとんど見られない。外反口縁を有する高杯Dの共伴する点は重要である。型式的には安定せず、多様な在り方が見られる。いずれにせよ山中型高杯の祖形は1段階に存在する。壺は加飾広口壺が主体であるが、無文の広口壺も散見でき、多くは体部ハケ調整である。

山中Ⅰ式2段階

朝日遺跡SZ339を標識資料とする。吉備系の高杯Aがこの段階から認められる点は重要であり、山中型高杯Bの誕生とは異にする。杯部の波状文が多用される段階になる。ワイングラス形高杯Gの盛行やパレススタイル壺を中心とする加飾広口壺が主体を占め、山中様式が確立した時期ともいえよう。ただ甕は台付甕であるが、口縁端部に面を持ち刺突文を施す山中型台付甕が主体的であるかどうかは明らかではない。甕Cとした古宮型台付甕も共伴する段階である。山中遺跡B地点の多くがこの段階の新相資料に所属するものと考えたい*****。なお山中型台付甕（甕D）は、その形態や調整技法からも古宮型台付甕を母体として生み出されたことは容易に推察できよう。前記したように山中型台付甕の祖形は八王子古宮Ⅱ2式の中に見いだせるものの、山中様式の成立を待つて定型化し、急速に普遍化するものと考え

* 宮腰健司編 2000『朝日遺跡VI』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第83集

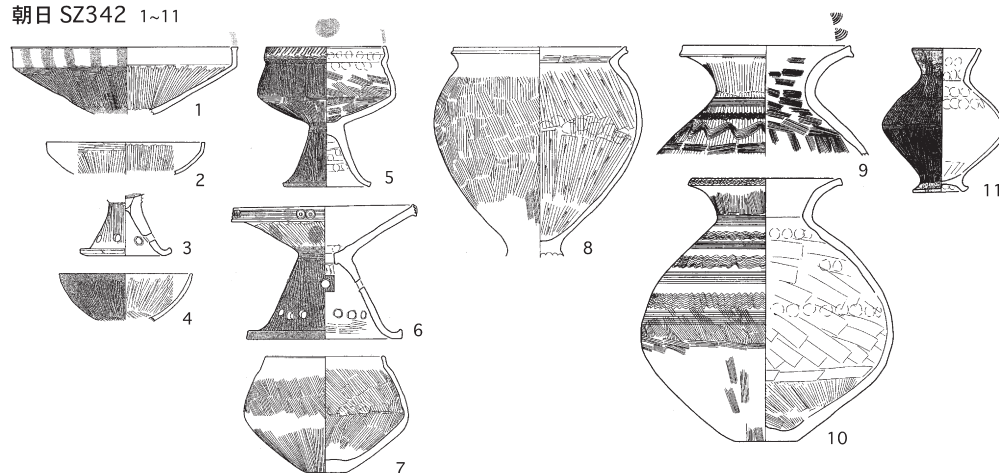
** 朝日遺跡出土品（『朝日遺跡V』P96・『朝日遺跡IV』図版27）

*** 朝日遺跡出土品（『朝日遺跡V』P99・P105）

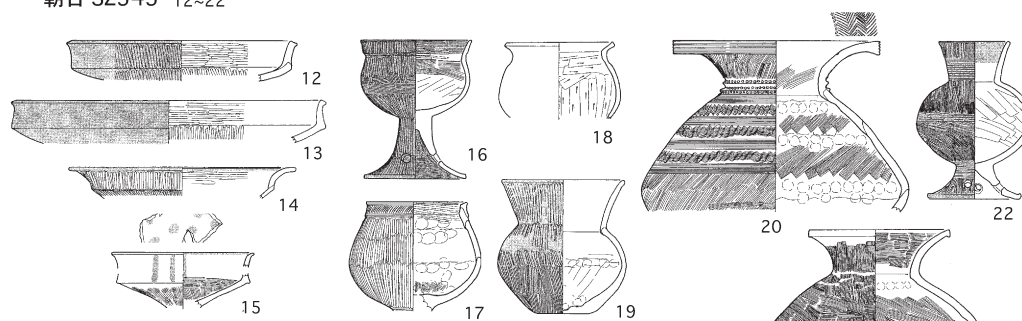
**** 赤塚次郎 1992『山中式土器について』『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第40集

***** 同上

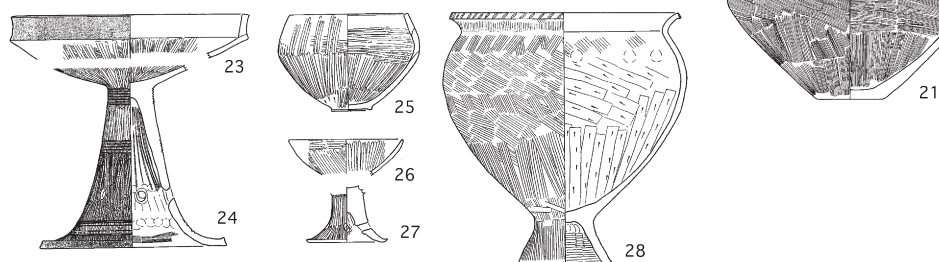
朝日 SZ342 1~11



朝日 SZ343 12~22



朝日 SZ340 23~28



朝日 SZ347 29~38

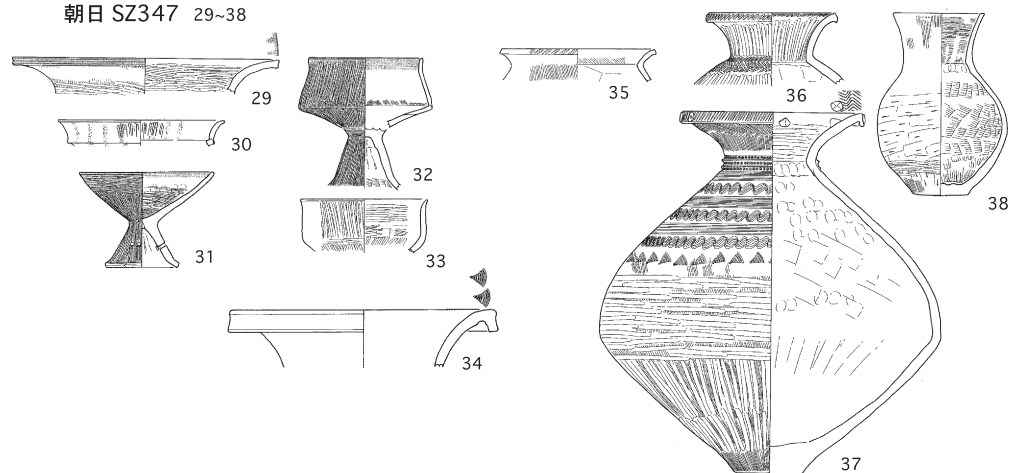


図8 山中I式1段階 (1/8) 『朝日遺跡VI』2000より

朝日 SZ339 1~24

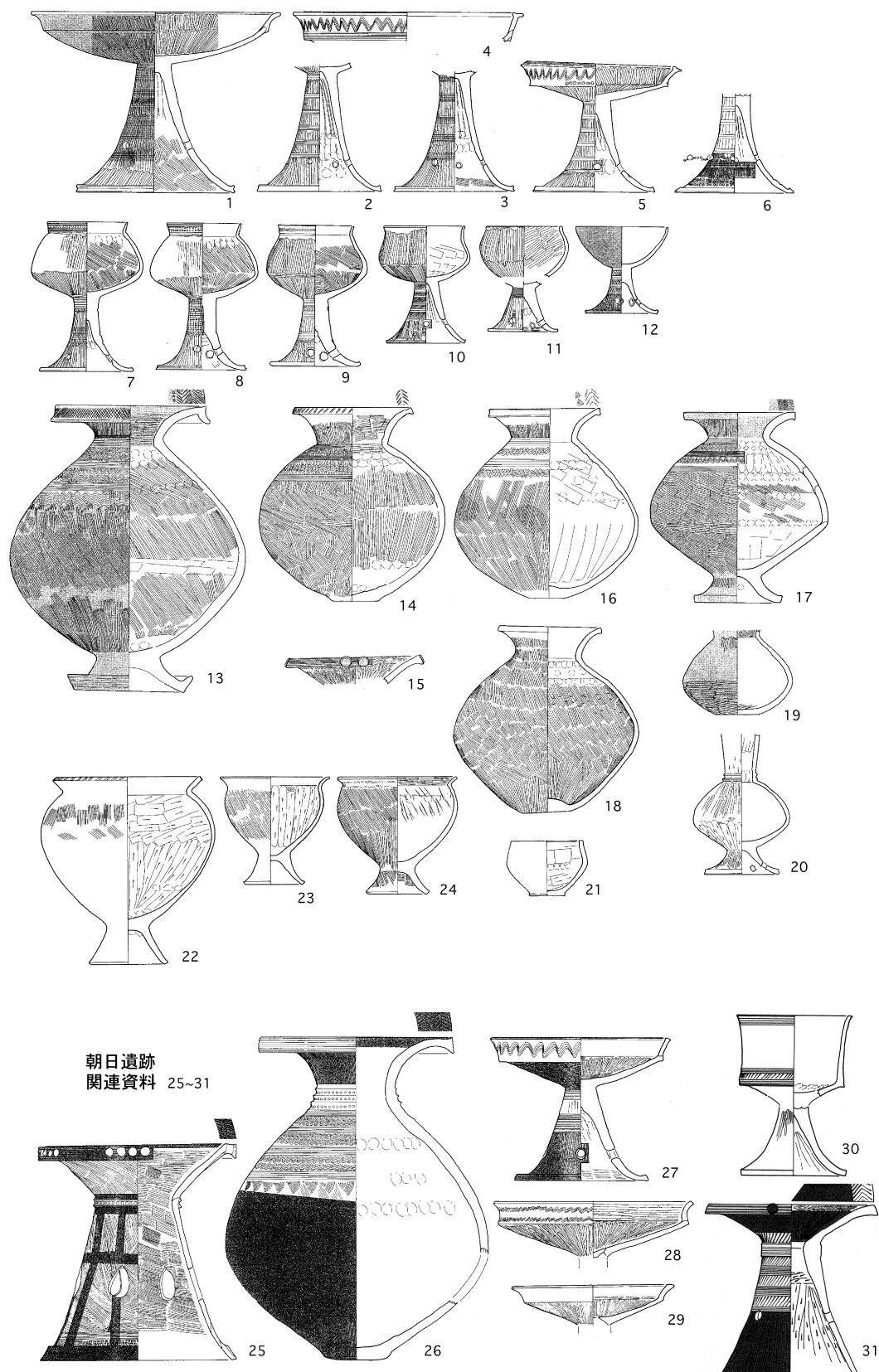
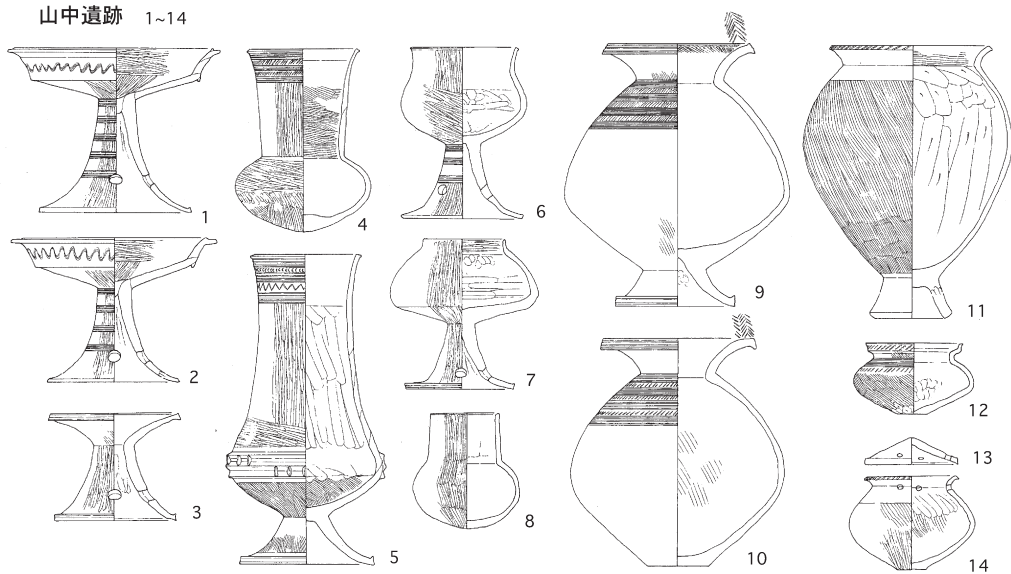


図9 山中I式2段階 (1/8) 『朝日遺跡V』1994・『朝日遺跡』2000より

山中遺跡 1~14



燕池遺跡 15~38

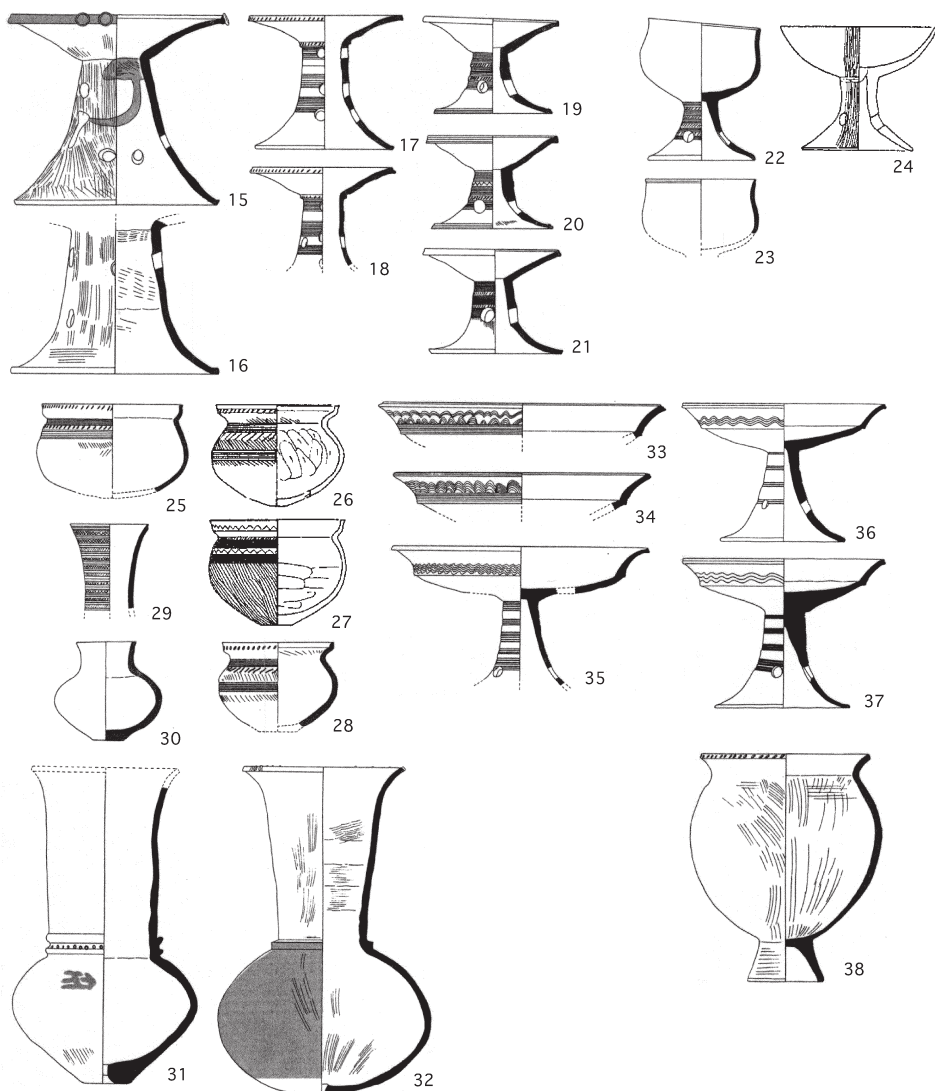
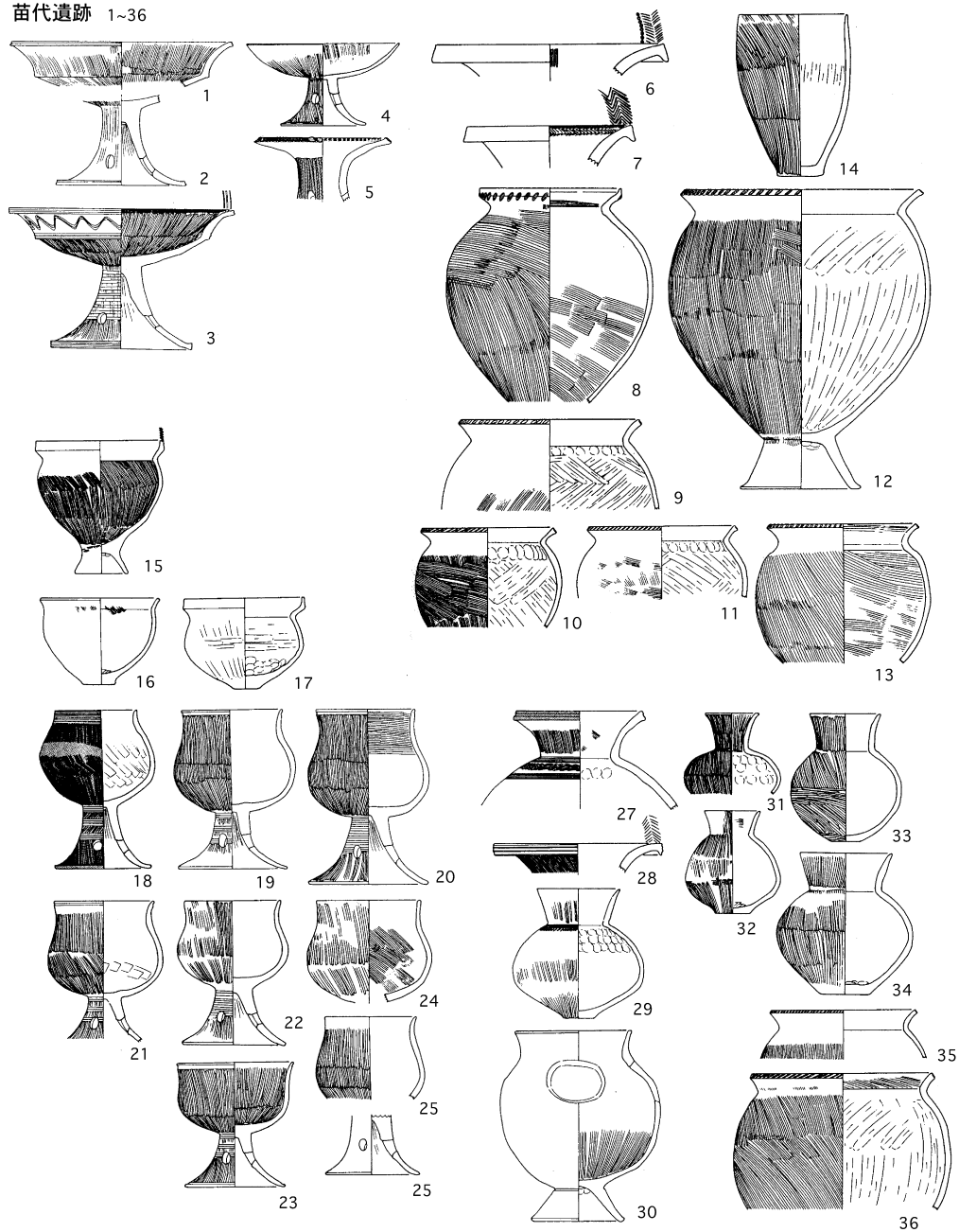


図 10 山中Ⅰ式 3 段階 (1/8) 『山中遺跡』 1992・『新編一宮市史』 資料編 2 1967 より

苗代遺跡 1~36



山中遺跡 37~39

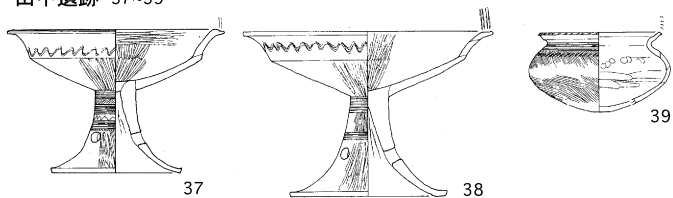
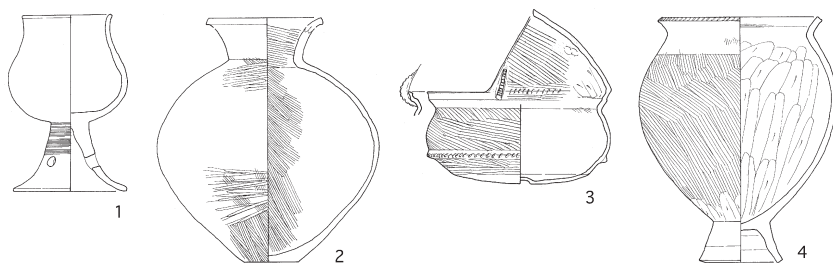


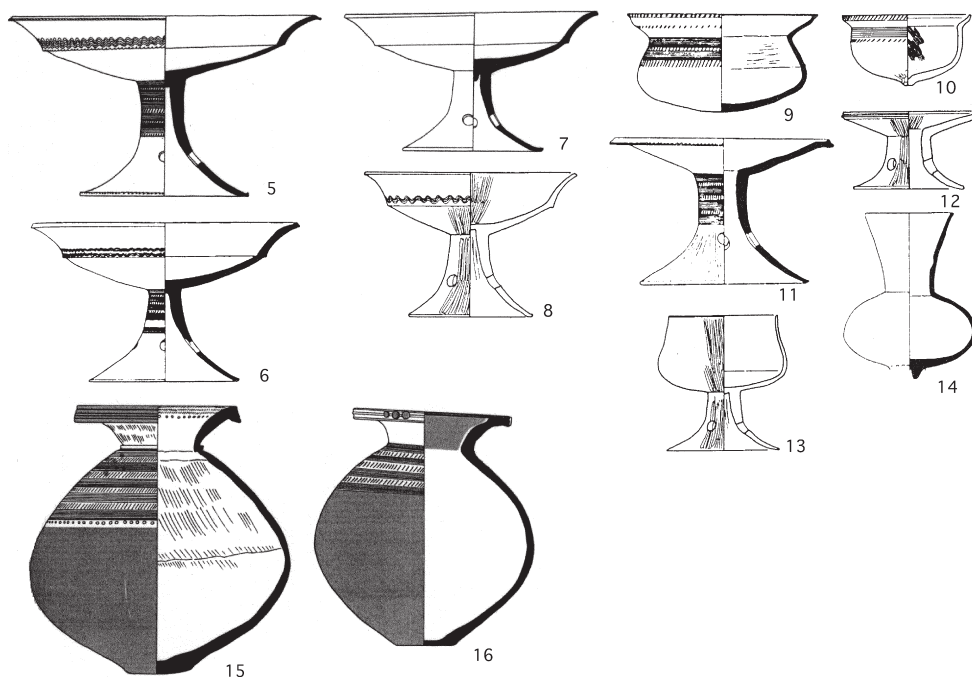
図11 山中Ⅱ式1段階 (1/8)

『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』1991 『山中遺跡』1992 より

朝日 SX192 1~4



北川田遺跡 5~16



八王子SD46・SD09下

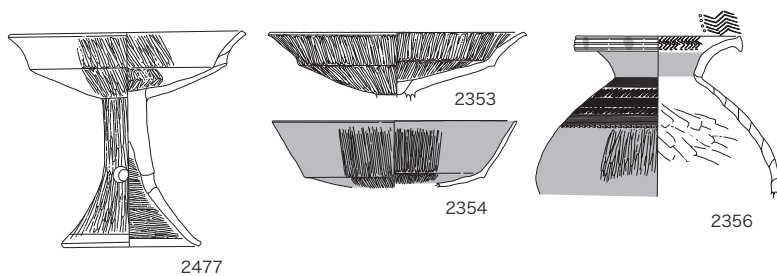


図 12 山中Ⅱ式 2 段階 (SX192・北川田遺跡) 3 段階 (SD46・SD09 下)
朝日 SX192 (赤塚より) 北川田遺跡 (『新編一宮市史』資料編 2 1967 より)



ておきたい。

山中Ⅰ式 3 段階

従来の編年では山中式 2 段階に相当する。山中遺跡 A・C・D 地点を中心とした資料群と蕪池遺跡の資料をもって標識とする。前者と後者は古新の関係でもある。台付甕は山中型台付甕が主体を占め、他の型式はほとんど認められない。壺に多様なデザインが登場し、加飾性が最も高く充実した内容を見せる段階といえよう。鉢 C である有段口縁鉢が主体を占め、長頸・短頸壺とともに器台とセット関係をなす。

3-2 山中Ⅱ式期

従来の編年の山中式 3 段階から 5 段階をもって新たに「山中Ⅱ式」を設定する。一宮市苗代遺跡第 2 地点出土土器をもって山中Ⅱ式 1 段階の標識資料とする。蕪池遺跡の段階以降に、器台や高杯脚部の透孔が 3 方向に変化し、山中Ⅱ式期にはほぼ透孔は三方向に統一される。また透孔の位置が脚部底部から徐々に上昇し、中央部付近に移行する。台付甕では甕 E とした新たな器種が出現する。鉢では鉢 C が衰退し、鉢 D や鉢 E さらに鉢 F としたものが散見でき、有段口縁鉢からの脱却が急速に進む。手焙形土器が出現する点も重要である。朝日遺跡 SX192 と北川田遺跡をもってⅡ式 2 段階の標識資料と考えたい。北川田遺跡のイメージが山中Ⅱ式期を代表すると考えても良い。その他、従来の山中式 5 段階を新たに山中Ⅱ式 3 段階としておきたい。

4 廻間様式の誕生

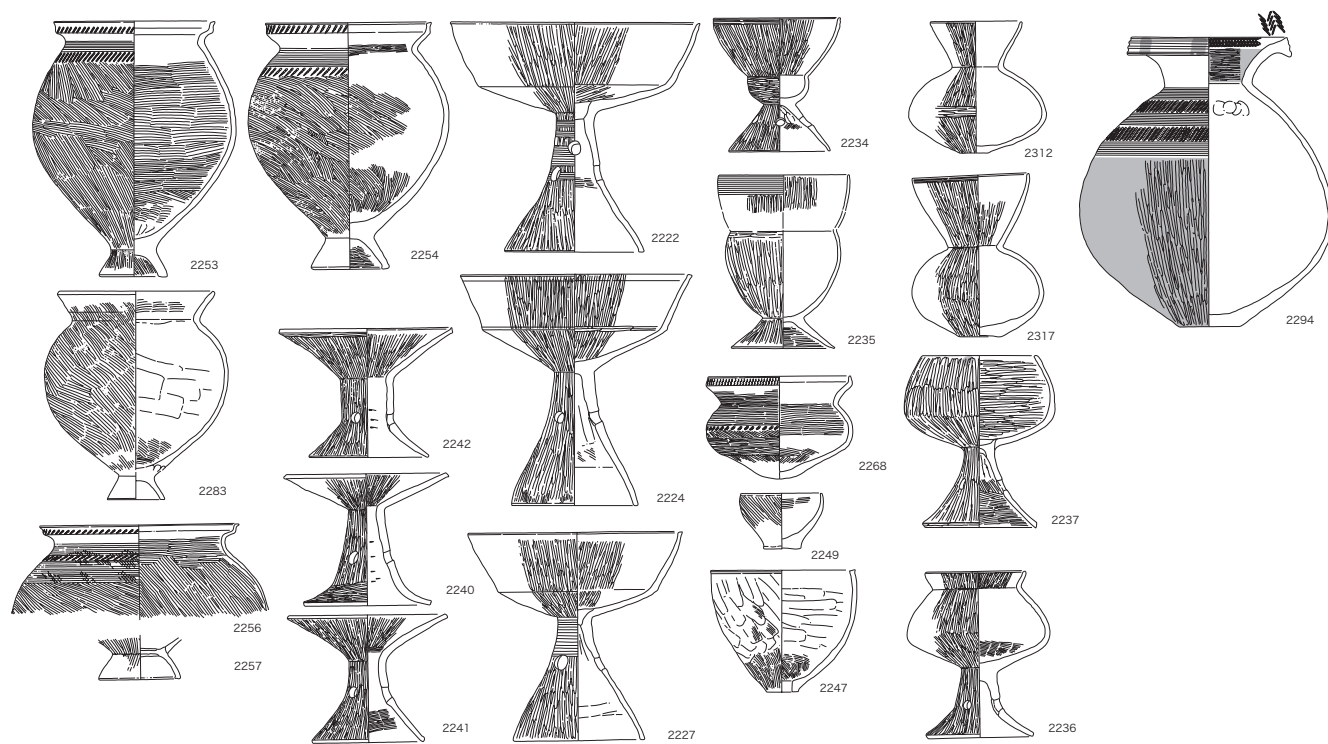
廻間様式は S 字甕の成立をもって設定した経緯がある。S 字甕の誕生のプロセスは、完全には解明されているとはいえないものの、S 字甕ゼロ類・雲出型甕がその鍵をにぎっている点は明らかである。さてかつて廻間Ⅰ式 1 段階を設定した後に、

これに先行する段階が存在する点を指摘し、0 段階を設定しておいた*。ここではあらためて廻間様式の成立を考える素材として廻間Ⅰ式 0 段階の標識資料を提示しておきたい。すなわち八王子遺跡 SK73 の一括資料をもって廻間様式の成立を考え、廻間Ⅰ式 0 段階とする。また SK73 の資料を補強するものとして SK01 を加えておきたい。この二つの土器群をもってほぼ全ての器種が内包されていると思われる。廻間様式については従来の見解を踏襲するため繰り返さないが、重要な視点のみ確認しておきたい。まず甕であるが、すべて台付甕である点と言うまでもないものの、第 1 の甕が甕 E とした有段口縁台付甕（尾張型）であり第 2 の甕が甕 F としたく字口縁台付甕（廻間型）であり、そして第 3 の甕として S 字甕が存在する。こうした点は組成的にも SK73 を概観すれば明らかである。このような台付甕の多様性こそが廻間様式の特徴でもあった。高杯は内彎志向の有段高杯（八王子型）であり、SK73 の段階において急速に杯部の深化が進み、劇的な変化がおきていることが分かる。高杯 2222 はむしろ山中Ⅱ式 3 段階の形態の特徴をもち、2224 から 2227 へと系列的な変化が見て取れる。脚部の透孔の位置が脚中央部からより上位へ変化する点も廻間様式の特徴であった。

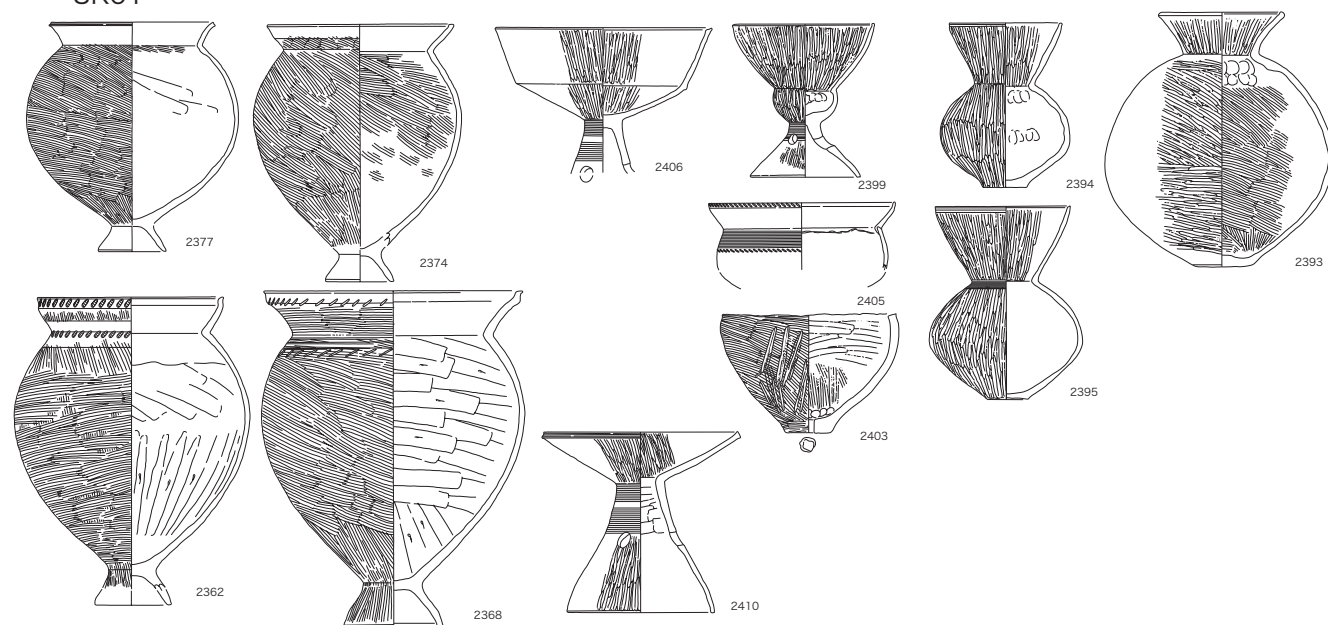
後続する廻間Ⅰ式 1 段階は、Ba 区 NR01 第 3 層最下層の資料と O 区 NR01 の資料が、この段階の良好な土器群である。続いて Ba 区 NR01 第 3 層下層資料は、おおむね廻間Ⅰ式 2 段階の資料を中心にして、一部に 3 段階の資料を含むことになる。有段高杯の杯部と脚部の比率において、おおむねこの段階まで脚部が凌駕する。以上の 2 段階までを廻間Ⅰ式前半期と呼ぶ。後半期である廻間Ⅰ式 3・4 段階の資料は SX04 の土器群と SD07 の一括資料が相当する。この段階になると SD07 の資料によっても明らかであるが、甕はほとんどが S 字甕によって占められるようになる。口縁内面に内彎する文様帯を持ち、赤彩波線文を施すパレススタイル壺 B は、Ⅰ式後半期に確立し、パ

* 赤塚次郎 1992 『廻間Ⅰ式覚書 92』『庄内式土器研究 I』庄内式土器研究会

SK73



SK01



SD09

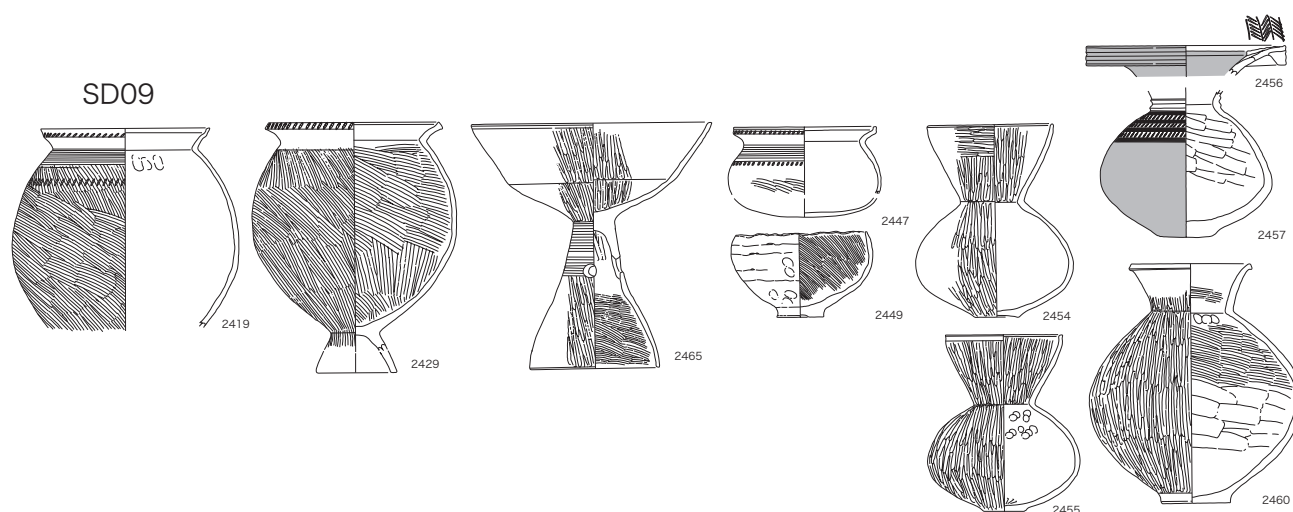
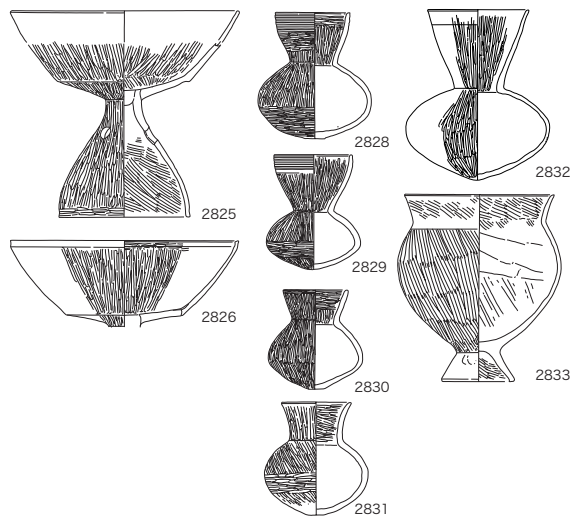


図 13 廻間I式0段階 (1/8)

Ba-NR01-3層最下



O-NR01

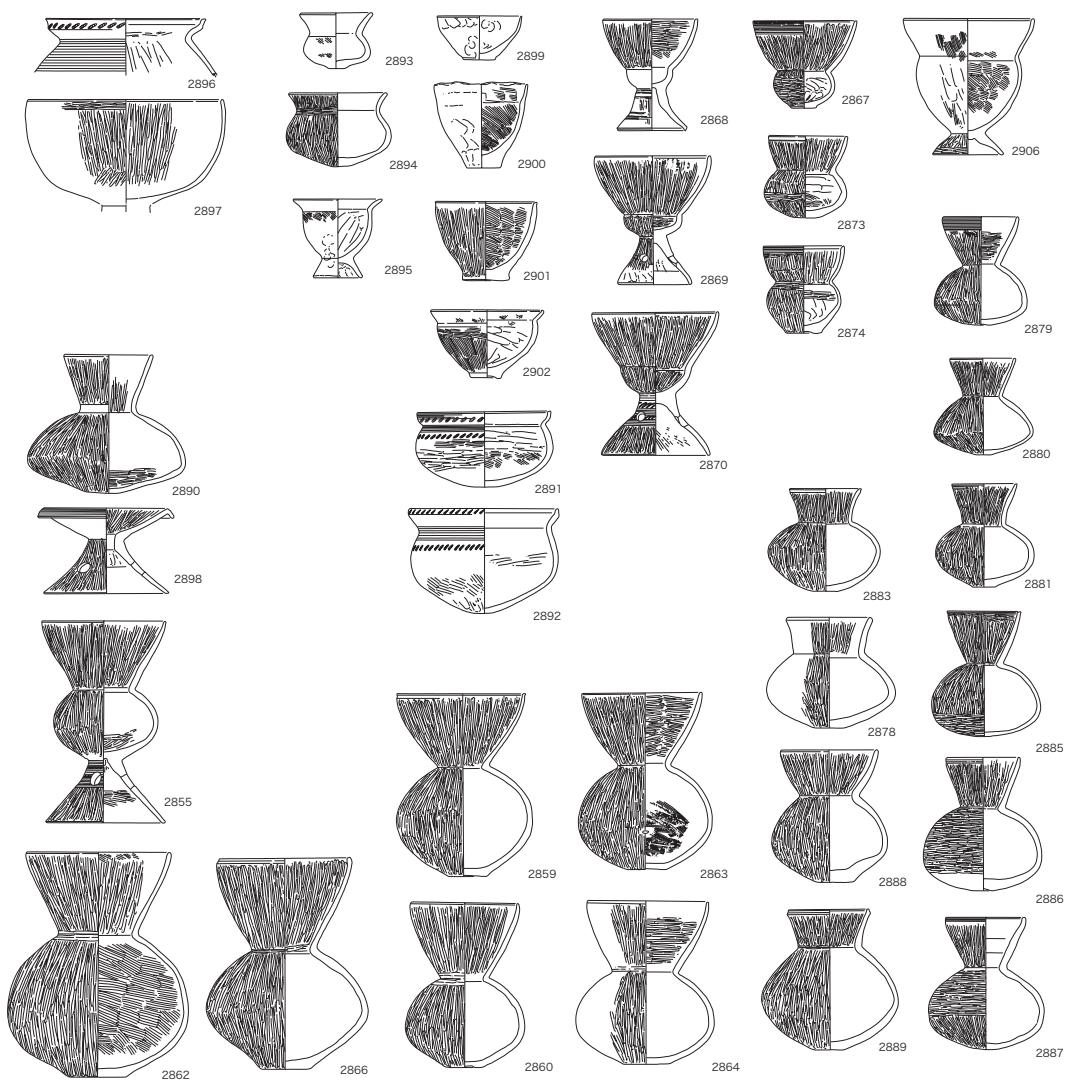
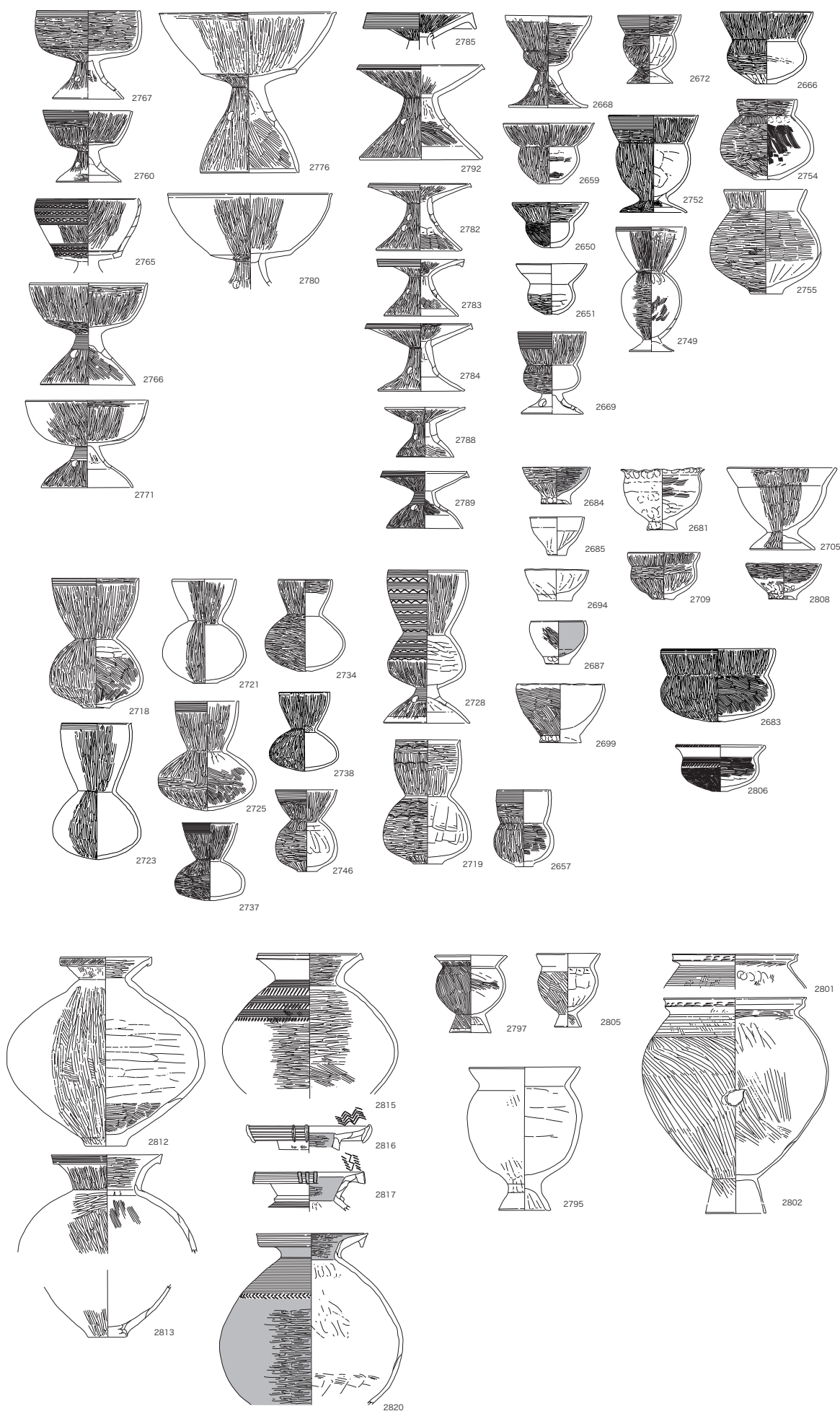
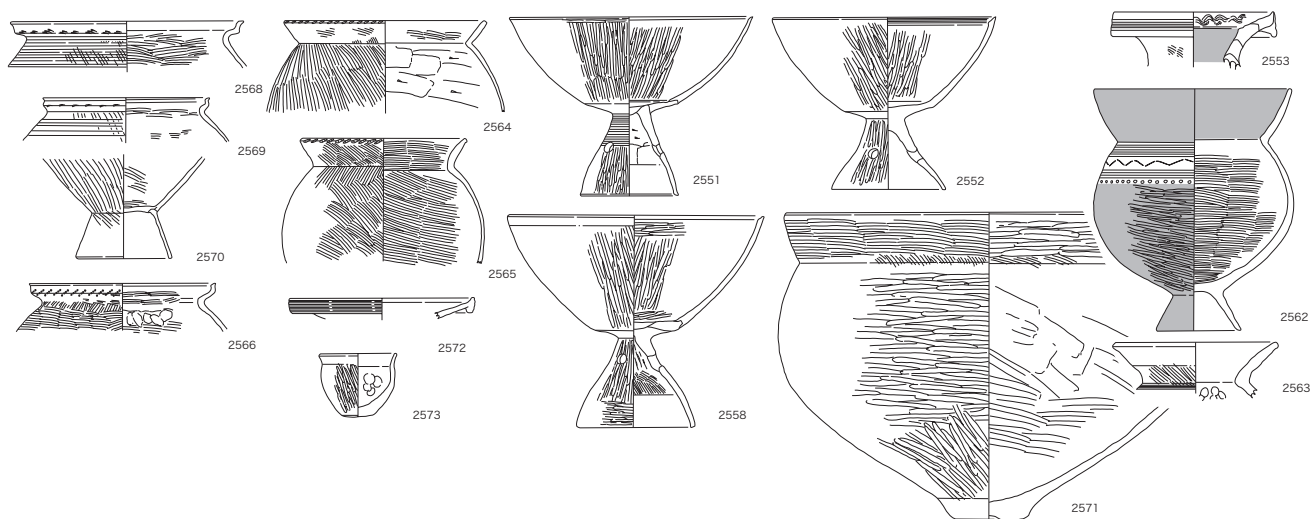


図 14 廻間I式1段階 (1/8)

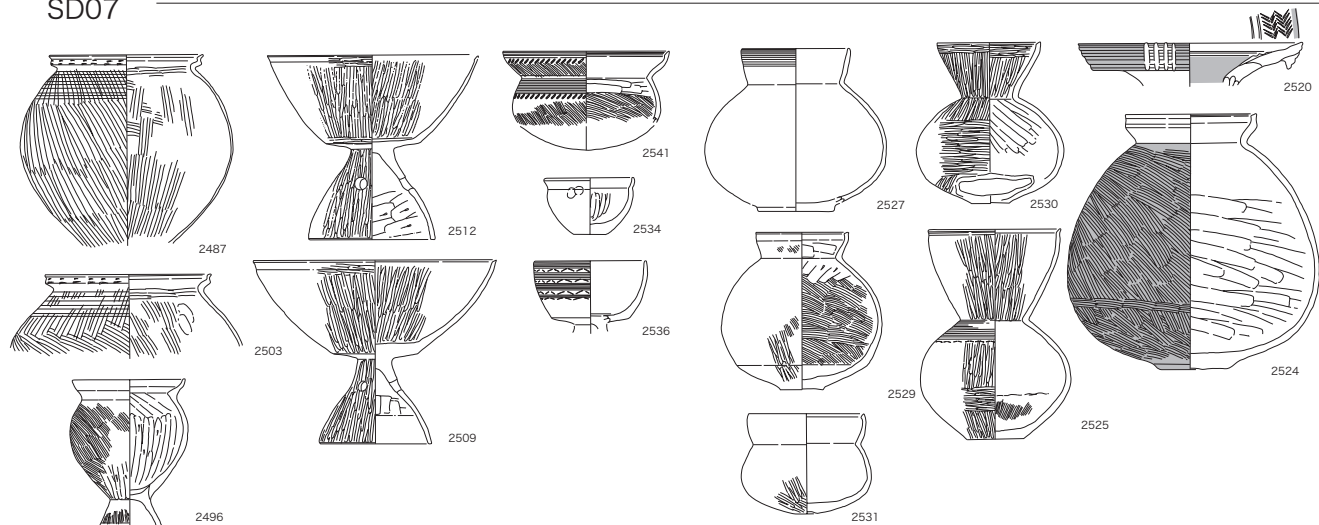
Ba-NR01-3層下



SX04-A



SD07



SX04-B・C

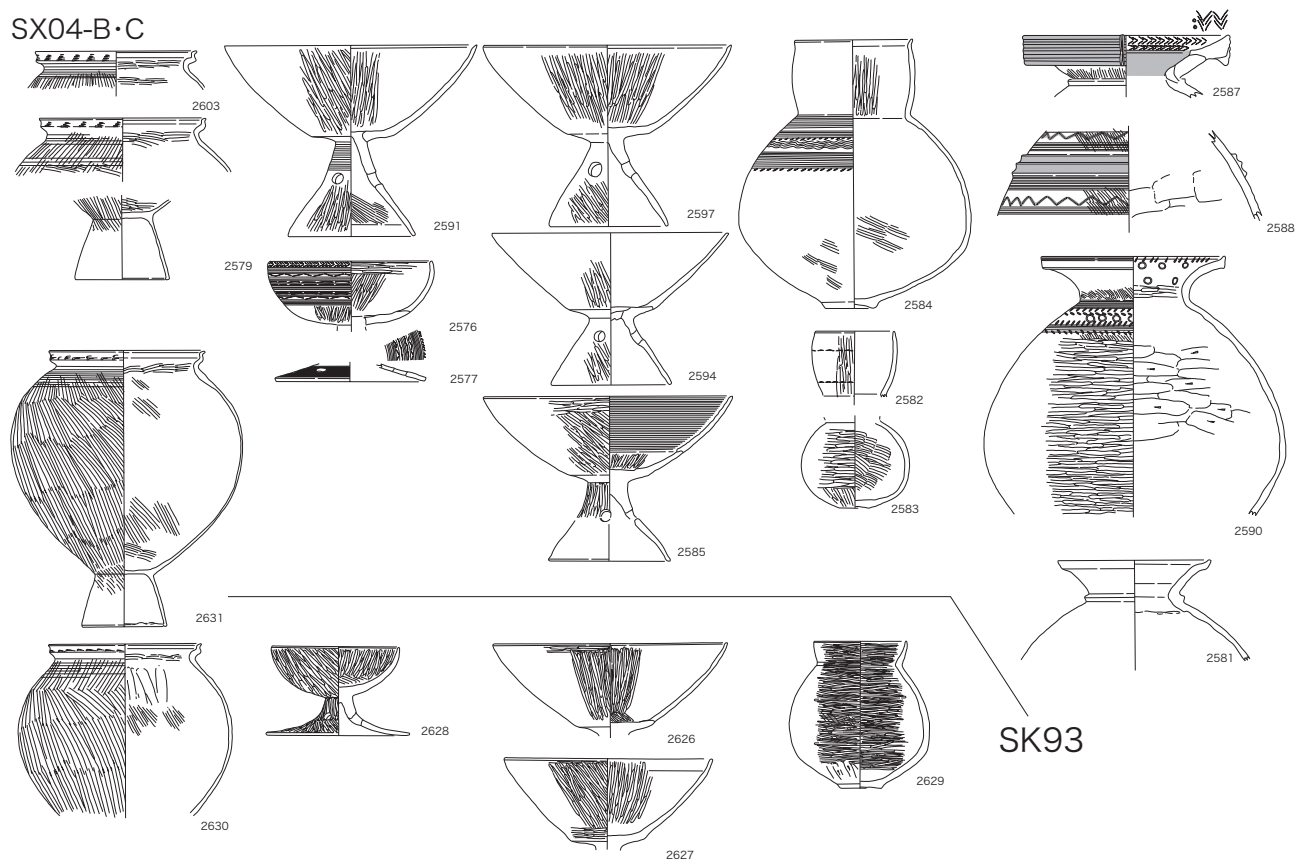


図 16 廻間I式3・4段階 (1/8)



レス壺の典型的なイメージを作り上げることになる。SX04A 群資料はほぼ廻間Ⅰ式 3 段階の新相資料であり、廻間Ⅰ式 4 段階としては、古相資料として SD07 が、新相資料として SX04 の B・C 群土器の多くがこの段階に所属する。なお SK93 は S 字甕 A 類新段階の資料が共伴するが、体部の球形化や高杯などは廻間Ⅱ式 1 段階古相の資料に併行するものと思われる。

5 弥生後期のイメージ

以上のような変遷を概観すると、土器様式において弥生時代後期とはおおむね以下のように結論づけることができる。すなわち紀元零年前後に近江湖南地域を中心とする土器様式が濃尾平野に到来し、新しい土器様式が成立した。八王子古宮様式である。この現象は伊勢湾沿岸部にどの程度に普遍化できるかは今後の課題であるが、近江湖南型甕は伊勢地域や西濃地域でも散見できるようである*。またどのような要因が彼の地を動かしたのかも興味深い点である。東海地域は近江湖南地域により弥生時代後期初頭段階の扉が開かれた。伊吹山麓地域から伊勢地域にかけて広く有段口縁甕が定着・存在するのはこうした要因があったからではなかろうか。やがて近江色が急速に消失し、濃尾平野独自の、あるいは前様式からの系列的なカタチのなかから新しい様式が模索されはじめる。再び在地色が蘇り、弥生時代後期中葉を迎えることになる。この激変の過程で主に丹後地域からの何らかの影響や交流が確認できる。柱状脚高杯などにその典型的な様相が読み取れよう。そして吉備地域に端を発した鬼川系の高杯などの影響を強く受けつつ、濃尾平野の中で画期的な土器様式が誕生する。土器様式の歴史の中で最も華麗にして斬新なデザインを所有する「山中様式」である。山中Ⅰ様式はおそらく濃尾平野低地部の極く限られた範囲内においてのみ存在する土器様式と思われる。ところが後期後葉である山中Ⅱ様式にな

ると一変して周辺地域との交流が活発化する。山中型高杯や山中型台付甕の影響が周辺地域に色濃く認められる。こうした変遷の後に濃尾平野では従来の様式概念を越える個性的な土器様式が成就されていく、廻間様式の誕生である。廻間様式の動向についてはここでは言及しないが、共鳴現象を呼び起こし、広域拡散志向をもつ興味深い土器様式である点は周知のことと思われる。この廻間様式誕生の中で、実は注目すべき土器型式が生み出されていた可能性が新たに判明した。以下その内容を整理しておきたい。

6 小型の精製土器と粗製土器

6-1 小型精製土器群の成立

八王子遺跡において廻間Ⅰ式前半期とは、大型建物を中心にして長方形区画や井泉遺構など、他の遺跡では見いだせない大型の遺構群が存在した。こうした施設の中で使用された土器の中に、「小型精製土器」が見いだされる。小型精製土器というと布留式土器に伴う古墳文化を共有する土器のように受け止められてきた。しかし例えば小型丸底土器の祖形一つを考えてみても、不明瞭な点が多い。その中で東四国地域に存在する小型鉢に求める考え方が多いようであるが、まさに同様な型式が古墳時代初頭段階に濃尾平野に存在する**。東海系内彎土器とした一群の型式である。その中で脚付の内彎土器は廻間Ⅰ式期を中心に伊勢地域から東三河地域まで広く散見できる。八王子遺跡ではこの小型丸底土器に類似する型式が多く見られた。ミガキ調整を施す小さな底部を有するものが一般的である。体部の器壁は大きさに比べてやや厚く、薄化するのはどうやら廻間Ⅰ式中ごろからのようでもある。

この型式の系列的な変遷については未だ不鮮明ではある。すでに廻間遺跡の報告の中でこの内彎土器については一定の評価***を下していたが、

* 西濃地域では、荒尾南遺跡（千藤克彦編 1998『荒尾南遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書 第 26 集）

** 赤塚次郎 1993「山中式という名のデザイン」『考古学フォーラム』3

*** 赤塚次郎 1990「2）共鳴現象」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 10 集 P115

東海系内彎土器

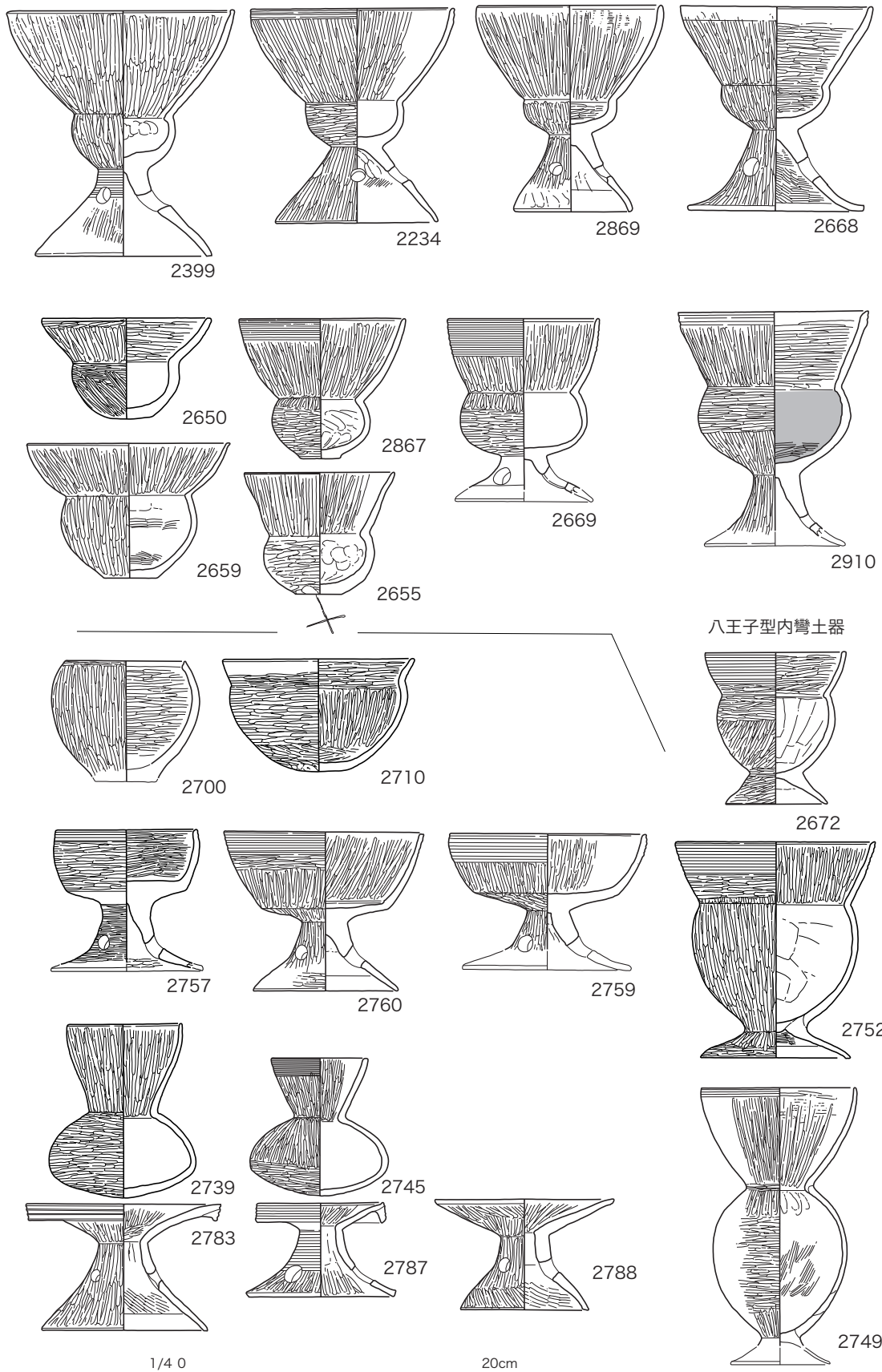


図 17 精製土器 (1/4)



八王子遺跡においてより明らかとなった。小型丸底土器・小型鉢・小型高杯そして小型器台。これらがすべてセットで八王子遺跡では出土している点が重要と思われる。出土地点は井泉遺構周辺部に多く見いだされる。特定の祭りの道具という評価ができよう。類似する形状は、朝日遺跡などでも見られ、濃尾平野の中で普遍化できるものと推測される。小型精製土器群の成立を廻間様式初頭段階に置く。なおその内の東海系内彎土器の成立は、現状では山中Ⅱ式3段階まで溯ることができる。山中Ⅱ式期のデザインが小型精製土器群の基礎にある。

では布留系小型精製土器との関係はどのように考えればよいのであろうか。まずその前提が問題である。従来の小型精製土器が、布留式土器を中心として生み出され、かつ普遍化していったというその前提そのものが問題にされねばならない。東日本に分布する小型（精製）土器群の中には形態的にも趣を異にするタカチが存在する。また所謂小型丸底土器のカタチの多様性は、本来多くの地域型の集合である可能性もある。こうした点がまずもって問題にされねばならない。そしてこのような先行する地域型の型式を認めたうえで、東海系内彎土器の在り方を問う必要がある。畿内の庄内様式の中にも小型土器の存在に注目する見解もある*。庄内式併行期における各地で生み出された地域型の小型精製土器の集合が、多様性を経て布留系小型精製土器に収斂されていくものと思われる。近畿地域とその周辺地域において、広く古墳時代初頭段階（庄内式成立段階）に小型精製土器群を成立される意味が共鳴されていくものと考えたい。

6-2 粗製土器と赤色付着土器

八王子遺跡のSX05 井泉遺構周辺部で大量の土器（廻間Ⅰ式前半期）が出土している。その多くがミガキ調整が見事に施された精製品に近いものであり、未使用品を含めて一過性の土器群である。

こうした土器群の中で粗製土器が点在する。ここでいう粗製品とはミガキ調整を代表とする調整技法を施さず、かつ器形のバランスが崩れた土器を意味することにしたい。整形技法には主に指ナデを多用し、調整技法を意図的に省略する。これは所謂土器製作者の技術的な未熟性によって生じたものとは異なる。言ってみれば意図的に粗製化した土器と考えたい。

粗製土器には直口鉢・有孔鉢・有底鉢という鉢のセットと僅かではあるが台付甕が存在する。壺類には基本的に類似した土器は見いだせない。ただし小型内彎土器（東海系）には粗製品が含まれる点は留意したい。いずれにしる強いて言えば鉢が粗製土器の主体を占める点は容認されよう。粗製土器の主役を演じるのは鉢といっても過言でない。廻間様式期では有孔鉢は三河地域や伊勢地域に比べると、濃尾平野においては極めて少ない。この型式は地域により出土量が極端に異なるようである。因に丹後地域ではまさに大量に消費される。粗製鉢の主体は明らかに直口鉢と有底鉢などである。そして小型品が多い点も重要といえよう。直口鉢をよく観察すると僅かであるが赤色物が付着したものが散見できる。片口直口鉢で内面赤色付着土器であり、かつ外面にはススが付着する資料が普遍的に存在する点はすでに指摘しておいた**。この付着土器は前方後円（後方）墳に伴う場合も多い。科学分析の結果からは八王子遺跡の資料はベンガラを主体とするものであるが、他の遺跡では水銀朱が検出される例も多い。八王子遺跡では2766の有稜高杯の杯部内面から水銀朱が確認されている。水銀朱を注ぎ入れる器であった。直口鉢はこうしたベンガラ・水銀朱を受け取る器として機能していたものと推測できよう。特定の祭りの道具として意図的に粗製土器を作成した。粗製土器と精製土器はその役割を異にしているものの、この時代に祭りの主役を演じる道具であったと考えておきたい。

直口鉢の類似した形態は弥生時代から認められる。単純な形態であるが、こうした直口鉢の小型

* 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 第49冊

** 赤塚次郎 1997「西上免古墳を巡る2つの問題」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第73冊



粗製土器が大量に使用され、一定の量的な出土を見る時期はある程度限定できるようである。つまり古墳時代初頭をもって、この種の型式が様式の中の一區画を占めるようになる。庄内式・廻間様式の成立段階こそがまさにこの直口鉢の時代であ

る。前述した小型精製土器群と表裏をなすように粗製小型鉢が成立する点をあらためて指摘しておきたい。それはあらたな時代の幕開けを知らせるものでもある。

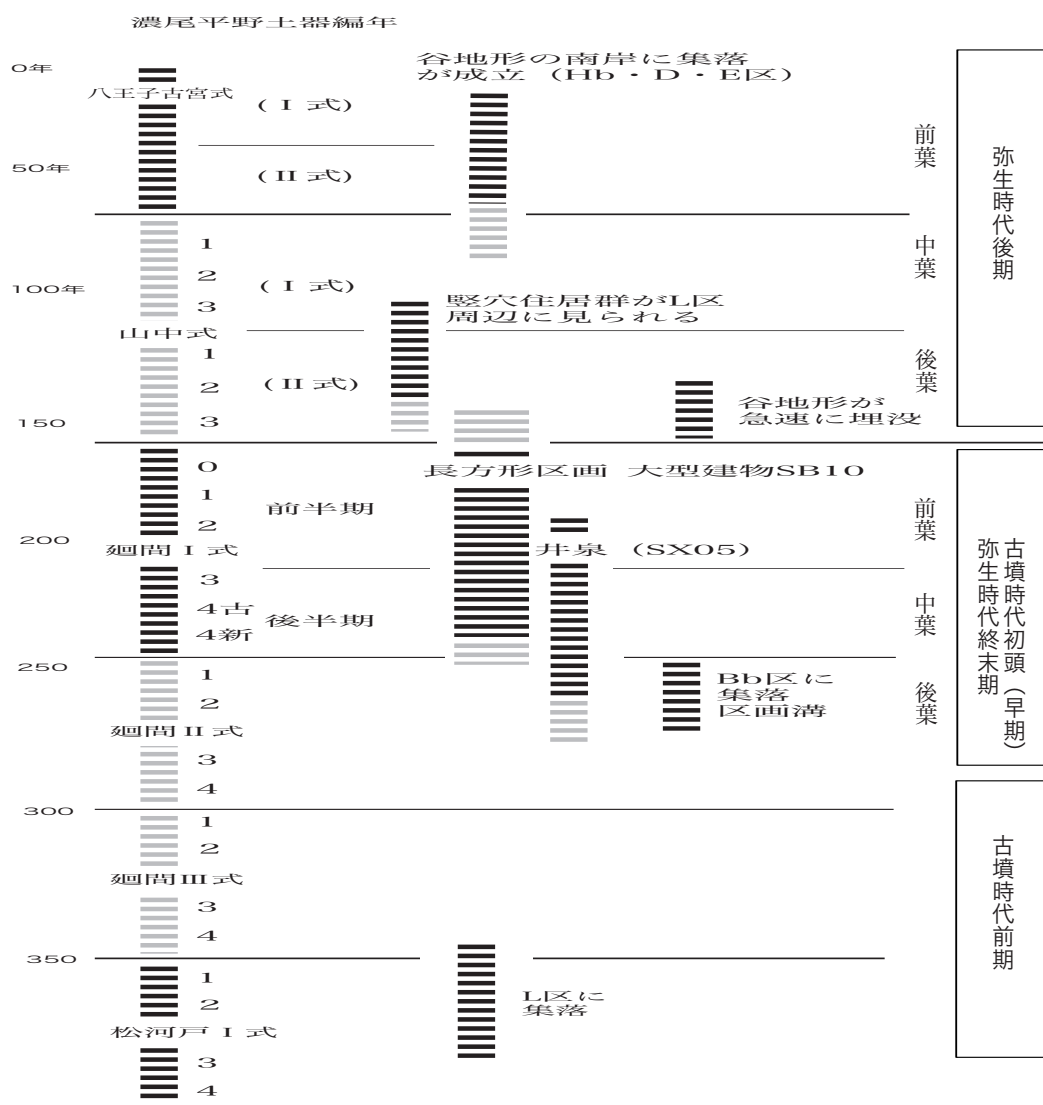


図 18 編年表

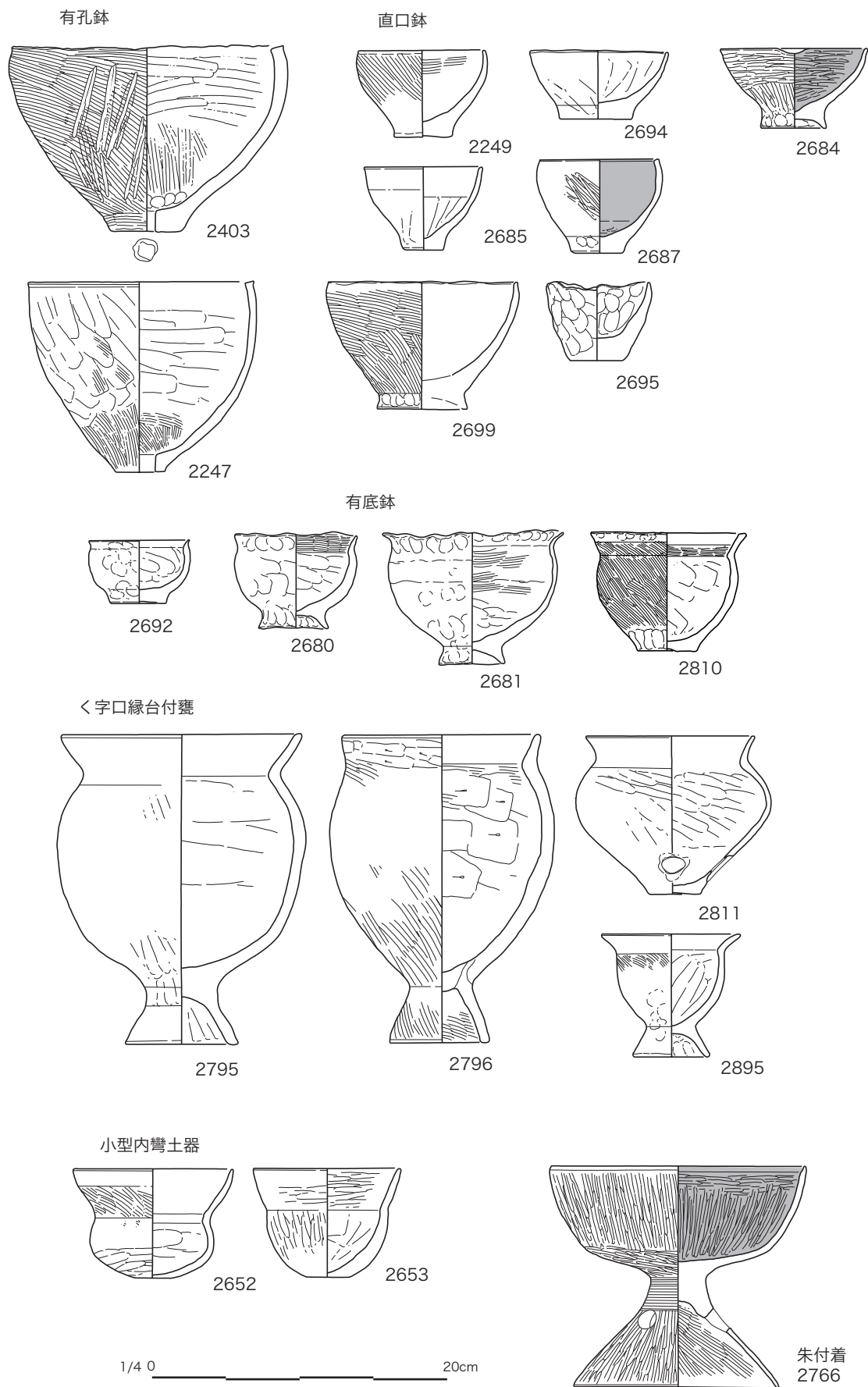


図 19 粗製土器 (1/4)